
十一ミス研推理録 2 ~ 口無し ~

つるめぐみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十一ミス研推理録2 ～口無し～

【Nコード】

N8921V

【作者名】

つるめぐみ

【あらすじ】

同時刻同現場で起きた殺人事件と飛び込み自殺。被害者は死亡、被疑者は意識不明、重要参考人は被疑者との関係を否認。その事件は関係者たちが語れない『口無し』事件だった。都立明鏡止水高等学校ミステリー研究部の部長の東海林十一朗は、警視庁刑事部トップの刑事部長の一人息子。思わぬ展開で『口無し事件』と関係を持った十一朗は、部員と周りを取り巻く刑事達と共に事件の真相に迫っていく。【口無したちが隠す事件の真相と動機とは？】＋・ミス研推理録の第二弾となっています。第一弾のネタばれの要素もあり

ますので、ご了承の上で読みいただくと幸いです。

0. プロローグ

その日 戌の刻に降った僅かばかりの五月雨は、地上を潤すとともに汚染された空気を一気に浄化した。

予報通りに降ってやんだ雨に応え、さされていた傘が次々と畳まれていく。人の足が滴を跳ねる音と車が飛沫を上げる音が、自然界と人間界の混合曲を奏でる。

創作された小さな水の溜まりが、車の前照灯の光を反射させ、通行人と構築物を照らした。

その光を神秘的な光芒と捉えるか、怪奇的な妖光と捉えるのかは人それぞれだろう。

冬に創作された土壌が放つ腐葉の臭い それを清々しい森の香りと喻える者もいる。

人にはそれぞれの感性が存在する。そして刻み込まれた本能も存在する。

街のネオンたちは眠りにつかないが、人が生物である以上、休息の時は必要となる。

都心の終電は遅い。しかし近隣住民の迷惑も考えられていて、轟音みなもとの源である電車は、日付が変わった頃にはとまる。

都会の喧騒から離れた場所なら、更に足が尽きるのが早い。うつかり終電を逃してしまえば、とんでもない交通費を払って帰宅するか、粗末な場所に厄介になるしかないだろう。

駅裏に存在する隠し居酒屋

その中で新入社員歓迎会をしていた会社員一同も、終電が尽きることを理由に暖簾のれんをくぐって外に出た。

新入社員歓迎会といっても、彼らにとってはかたちだけのものだ。飲む口実に過ぎない。

二次会の話も出たが、一人の会社員男性は断った。長時間、電車を乗り継いでいかなければ帰れない場所に住んでいたからだ。

今、出なければ最寄り駅に繋がる終電には間に合わない。
会社員は、ほろ酔い状態のまま皆に別れを告げると、駅へと足を向けた。

雨が降ったのは彼にとつては幸運だった。冷やされた空気が酔いと火照りをさましてくれる。このまま駅構内に入ってしまったと、何が起きるのか本人も予想がつかない。

頭上に広がる夜空には、満月と星の煌めきがあった。数時間前には天上を覆い隠していた雲も、薫風の脅威に負けてしまったようだ。そこは会社員が数分前にいた場所と比較してしまえば別世界だ。人の気配もなく、時が止まったかのような静寂空間しかない。

ただ路面を叩く靴音だけが響き渡る。

しかし、会社員は急がなければいけない時刻だというのに足をとめた。

右手の路地から争うような声を聞いたのだ。それも尋常ではない怒号だ。

「てめえ、やりやがったな！」確かにそう聞こえた。

直後に男の唸り声と重いモノが倒れるような音が響く。

先に見てはいけけないものがあるのかもしれない。しかし、見ないわけにもいかない。

最悪の場面を想定しながらも、会社員は恐る恐る路地を覗き見た。そして会社員は見た。視線の先にある戦慄走る現場を

血溜まりの中に、男が仰向けの状態で倒れていた。地面には刺された証拠ともとれるような、鮮血に濡れた刃物が転がったままであった。

刺された男に意識はあるのだろうか。夥しく出血している腹を押さえながら、荒い呼吸を繰り返している。すでに致死量近い出血をしているらしく、見開かれた瞳は天を眺め、蒼白の顔は生気が失われかけていた。

現場を直視した会社員は警察に通報しようと、懐に入れていた携帯電話を取り出そうとした。

しかし、途端に息をとめると、金縛りにあつたかのように動けなくなつてしまった。

足取り覚束ない状態おぼつかで、ふらふらと一人の男が向かってきたのだ。衝撃の現場を見てしまった上に、真正面から来る異様な影を纏つた男

誰が見ても考えるだろう。こいつが犯人に違いない。では、唯一の目撃者である自分は、どうなつてしまふのか……口を封じられてしまふではないか。

ところが会社員の恐怖をあざ笑うかのように、犯人と思える男は素通りした。そのまま目的があるかのようにゆっくりと大通りに出て進んでいく。

会社員はあまりの恐怖で腰を抜かすと、犯人であろう男の動きを眺め続けた。

男が向かう先には、遮断機が降り始めた踏切がある。心臓の鼓動が発するリズムにも似た警告音と、血の色にも見える左右に点滅する赤色灯が、電車がくることを告げていた。

会社員は覚束ない足取りで向かう男を見て、まさかと感じ取った。慌てて立ち上がると、携帯をつかんでいるのも忘れて駆けつけた。

が、思い虚むなしく、遮断機を潜つた男は、線路上に足を踏み入れていた。

覚悟を決めたように目を閉じた男が、手に持っていた何かを後ろポケットに捻じ込む。

こつなつてしまえば、助けに行くのは無謀としか言いようがない。冷静に、そう判断した会社員は、踏切に設置されている非常ボタンを押した。直後に、異常を感じ取った電車が突っ込んでくる。

距離は百メートルもないだろう。鼓膜を激しく揺らす警笛音と、心臓が潰れそうなブレーキ音を立てながら、電車は男に迫っていく。微かな願いは叶わず、無常にも電車は男を呑みこんだ。それでも急停車の残響をレール上に置きながら、数十メートル先まで進んでいく。完全に停車するまでの時間は、数刻ほどだったろう。

しかし、目撃者である会社員は、新説の特殊相対性理論をも打ち立てるかのような、数百倍もの時間の歪みを感じていた。

一分後には先程の騒ぎが嘘のように、踏切の音だけが響く時間が訪れた。

間近にある駅構内から、『只今、電車が急停止しました』という放送が流れ、現場までとどいた。

先頭車両にいた乗客の何人かは、衝撃の瞬間を目撃したに違いない。手で口を覆い隠す女性や、状況を確認しようと窓にへばり付く者の姿があった。

すぐに電車に呑みこまれた男の安否を確認しようと、運転手と車掌が駆け降りてくる。

電車前方に付いた血痕が、凄惨な現場を物語っていた。誰もが男は死んだと思った。

しかし

「おい、まだ息をしているぞ。救急車！」

電車の隙間に挟みこまれるように倒れ伏している男を、確認した運転手が声を上げる。車掌は慌てて携帯電話を取り出すと、無線連絡もするために車掌室に戻ろうとした。

現場は戦場となった。運転手は下にいる男に向かって声をかけ続けている。

その一部始終を見て呆然としていた会社員も我に返ると、携帯電話を手に叫んだ。

「車掌さん。救急車は二台呼んでくれ！ あっちの路地で大怪我している人もいる」

車掌は足をとめて会社員を見た。

「二人？」

状況を把握できないまま問い返す。

同時刻、同現場で起きた殺人事件と自殺未遂

殺人事件は閑静な住宅街の住民たちを恐怖に陥れ、飛び込み自殺は帰宅時間に追われた乗客数万の足に影響した。

遠くでは、警察車両のサイレンが鳴っているのが聞こえていた。

1・都立明鏡止水高等学校ミステリー研究部

都立明鏡止水高等学校ミステリー研究部の部室は、校舎別館の最上階、階段を上がった突き当たりが存在する。

別館の最上階には、一クラスに相当する数のパソコンが置かれている教室や、映写機を設置している教室が並んでいる。特別教室とされる授業の場が並んでいるので、通常の時間帯には、ほとんどの生徒が立ち寄らない。

だから、ミステリー研究部の部員たちは静かな場を求めて昼食は必ずここに食べにくる。

父親が警視庁刑事部トップの刑事部長であり、ミステリー研究部の部長でもある東海林しやうじ十一朗いちろうも例外なくここに来る。幼馴染みの三島裕貴しまゆきも当然というように付いてくる。

オマケという失礼だが、部員の氷川零ひかわれい、通称ワックスも購買パン片手に駆けつける。

現在のところ、部員は三名。全員が三年生で来年は卒業、ミステリー研究部廃部という事態に直面している。

いや、それ以前に部室の確保が危うい。部室は五人以上いなければ与えられないのが、学校の決まりだ。ミス研部員にとっての憩いの場のピンチである。

しかし、その憩いの場の状況は、この一か月間で一変して戦場に近さまい様さまになっていた。

「だから、言ってるだろ東海林。俺達が入部してやるって言ってるんだって。ありがたく恩を受けるよ!」

前は誰も訪れなかった空間に、今は昼休みともなると数十人の生徒が大挙して押しかける。それは放課後でも変わらない。

数十人の生徒はそれぞれがある『野望』を片手に、一か月前には興味も示さなかったこの場所に訪れているのだ。

十一朗は母の作った特製弁当のアスパラベーコン巻そしゃくきを咀嚼し終

えると、席を立った。

そして数十人の生徒たちの前に進み出て、全員の顔を反芻するように繰り返し見る。

「恩を売ろうとしているみたいだけど、その好意なら受けないよ。校長が俺達の卒業までは部屋を貸すと言ってくれてる。あと、みんなの入部理由は？ 全員が二、三年生みたいだけど、前の部はどうしたんだよ？ 退部したのか？」

十一郎の質問に全員が顔を見合わせて口ごもった。明らかに裏がある行動だ。

それが、一か月前までは来なかったのに、今になって訪れる理由である。

「そいつ等の考えることなんて、単純明快すぎて推理にもなんねえよ」

声を上げたのは部員の一人であるワックスだ。絶対に乱れないように固めた、自慢の髪形を整えながら、購買では売り切れ必至、希少価値とされる焼きそばパンを口にくわえて、十一郎の隣に立つ。

「どーせ、ミス研の名誉ある褒賞のお零れを頂戴したくて来たんだろ？」

嫌味っぽく言うワックスの口調に逆切れしたのか、先頭にいた生徒が食ってかかった。

「うるせえ、お前と交渉はしてねえよ。お前だって人のこと言えないだろ。推理とは名ばかりのオマケだもん。久保の菓子に釣られて入部したって聞いたぜ！」

ワックスが眉間に皺を寄せた。殴る数秒前だ。しかし、十一郎はワックスが拳を引いた瞬間に、二人の間に割って入った。二人が十一郎の行動に目を丸くする。

十一郎はそんな二人の反応に構わず、罵倒を浴びせてきた生徒の胸倉を勢いよくつかみ上げると、殺意のこもった目で睨みつけた。一触即発の場面に、その場にいた全員が息を呑む。

「うちの部員を馬鹿にするなら帰れ……ここにはお前の居場所はない」

い」

いつもとは違う十一朗の雰囲気、ワックスのほうがり退いた。周りにいた生徒たちも波が引くように、距離を保ちながら状況経過を見守っている。

全員の反応を一瞥した十一朗は、つかんでいた生徒の胸倉を乱暴に放した。押し出された勢いで体勢を崩した生徒は、後ろにいた者たちに寄りかかる。

絶対に言い負けないという自信があったのだろう。胸倉をつかまれた生徒はズタズタに引き裂かれたプライドを返上するかのよう

に、怒りで充血した眼を十一朗に向けていた。
そんな生徒を前にしても十一朗は退かなかった。十一朗にとってミス研部員は友達や仲間以上の存在なのだ。心の友を愚弄された怒りは、謝罪だけでは収まらない。

「ミス研部員に必要な能力を知っているか？ 観察眼だ。ここにいて誰が何組でここに何回来ているのか、どの部に所属していたのか、全て俺の頭の中にある」

十一朗は再び、来ている生徒全員の顔を見た。中には慌てて顔を隠す者もいる。途中で退部した理由がミス研のお零れ褒賞を欲しいからなどということでは、クラスの笑い者になりかねないからだ。

更に十一朗は、この歓迎されない客人たちを追り返す策を巡らせながら口を開いた。

「だけど、どうしてもという奴がいるなら入れてやってもいい。けど、今から出す問題を解けたらだ」

十一朗の言葉にワックスのほうがり「問題？」と声を裏返して息を呑んだ。

「警視庁と警察庁の違いは？」

十一朗の問題に答えられない生徒が、相手が悪いと感じたのか、一人、また一人と去っていく。

それでもこの問題に立ち向かおうと一人の生徒が「警視庁のほうが警察庁より偉い」と答えた。これを聞いたワックスが愉快そうに

笑う。

「答えになってねーし、間違ってるし。違いは警察庁が国の行政機関の一つで、警視庁は都の公安委員下の機関、そして警察で一番偉い地位にあるのは警察庁長官」

さらりと答えたワックスを見て、部室内にいた裕貴のほうが「嘘……」と呟いた。

呟いた裕貴を十一朗とワックスは同時に振り返って見た。すると裕貴が慌てて手を振る。

「知らなかったってわけじゃないわよ。ワックスが答えられたのが意外だったってだけ」

多分、知らなかったのだろう。というよりも、あの生徒の答えが正解と思っていたに違いない。

十一朗は息をつくと、残った他の生徒たちを見た。

「本気でミス研に入部したいのなら、それなりの興味をもって来てくれなきゃ困る。それに、あの事件があつて、まだ一か月だ。俺が何を言っているのかは、もう分かるよな？」

十一朗の見えない言葉の刃に切りつけられて、生徒たちは負けを認めて姿を消した。

これではばらくは、騒ぎも収まることだろう。

部室に戻って席に座った十一朗が、探偵ものの小説を読み始めると、ワックスが隣の席に座ってから言った。

「ありがとな、プラマイ」

思いがけないワックスの言葉に、十一朗は顔を上げた。ちなみにプラマイは十一朗の名前を文字ったあだ名だ。幼馴染みの裕貴もそう呼ぶ。

「何が？」

ワックスがお礼を言ってきた意味がよく分からなくて、十一朗は応えずに聞いた。

「かー……惚けんなよ。あいつの胸倉つかんですごんでくれたら。お前さ、俺に対してそっけない時があるから、そんなに俺のこと気

にしてくれてないのかなと思っていたんだよな。だから、意外な面を見たと思つてさ。嬉しかった。感謝してるよ」

予想外のお礼に十一朗は困惑した。向かいの席にいる裕貴が含み笑いを浮かべている。

「正直じゃないもんね。プラマイは……だけどねワックス。プラマイはみんなのことを気遣つてくれてるよ。あの時だつて……」

一か月前に発生した公開自殺　その裏に自殺屋がいる。ミス研部の一員だった久保京子くぼきょうこは、いち早くその陰を捉えて自殺屋に近づいた。

だが、事件に深く立ち入ってしまったために、自殺屋の手にかかつて命を落とした。その自殺屋の正体をつかんで自首に追いこんだのが他でもない十一朗だ。

事件が解決したのは一か月前。その真相は多く語られていないはずなのだが、噂とは怖いもので、どこからか話がもれて広がった。

だから、自殺屋事件を解決したミス研部の一員　という称号が欲しくて、何人もの入部希望者が殺到しているのだ。

「別に俺は……あいつが平気で殺された久保のことを言つたから腹が立つただけだよ。それに、同じ思いを共有する仲間は、今の段階なら俺達だけで構わない。違うか？」

ワックスが裕貴の近くに寄つていって、「今のは本心？」と質問していた。裕貴は「半分本心、半分照れ隠し」と答えた。

二人は隠れて話したつもりだろうが、その内容は十一朗にもすっかり聞こえている。

「あのさ、どうでもいいから早く昼飯食べよ。休憩時間終わっちゃうぞ」

二人が時計を見て「やべっ」「ほんとだ」と慌てて、残ったものを口に放り込んだ。

残り時間五分。そろそろ教室に戻つておいたほうがいいだろうと思つた時だった。部室の前に立つ、一つの影に気づいた。

先程、訪れていた生徒たちとは、全く違う印象を放つ女子生徒だ。

一直線でこちらを見る純真な眼差しは、ミス研の称号が欲しくて訪れたというようには見えない。

それに、学年を示す名札に付いた印の色は一年生に間違いない。本当の新人部員だ。

その女子生徒を見たワックスが、今にも転ぶのではないかという勢いで駆け寄った。

「君、一年生？ クラス何組？ 名前は？ ああ、俺の名前は氷川零。通称ワックス。入部手続きなら奥にいる部長にだけど、一応聞いてく。彼氏いる？」

マシガンのように繰り出されるワックスの質問に、実直に答えようとしていた女子生徒だが、もはやついてこれない状況に陥っている。

ようやく質問が中断しても、女子生徒はどれを先に答えればいいのか困惑していた。

目をキラキラ輝かせたワックスは、尚も答えを迫る体勢で彼女に迫っていく。

「よせよ。引いてるだろ」

その様子到我慢しきれなくなった十一朗は、読んでいた推理小説の表紙でワックスの頭に突っ込んだ。反応は予想通りというか、頭を抱えながらばやいている。

ようやく女子生徒は話を切り出す間を感じ取ったのか、一枚の紙を取り出すと、十一朗に差し出してきた。

紙には学年とクラス、氏名が書いてある。一番上の欄には『私はミステリー研究部に入部します』という宣言が書き込まれていた。

正式な入部届けに間違いない。

「一のA……^{やぎ あやか}八木綾花さんか」

十一朗が確認したと同時に、綾花は「あいつ」と声を上げた。

「刑事ドラマが好きで、よく見るんですけど……その程度の知識では入部できないでしょうか？」

先程の言い争いを見ていたのだろう。自分も問題に答えなければ

いけないと思っっているのかもしれない。

部室の奥で裕貴が「いいんじゃない。女の子大歓迎だよ」と声を上げた。

とはいえ、彼女の知識がどれほどのものなのか、十一朗は興味を持った。

「じゃあ、入部できないは別にして、問題に答えて……警察官の階級を下から順に言ってみて」

不意に綾花が真剣な表情になった。

これは勘で答えられるような問題ではない。知識がなければ解けない問題だ。刑事ドラマが好き　彼女の話が嘘か本当か、十一朗は試したつもりだった。

「巡查、巡查部長、警部補、警部、警視、警視正、警視長、警視監、警視総監、警察庁長官……です」

指折り数えるように綾花は答えていく。一つにつき答える間はあったが、間違いはなかった。それ以上に彼女の知識の高さに感心した。十一朗は更に綾花を試した。

「巡查長を入れなかったみたいだけど、理由は？」

「えっと……階級じゃなくて職位だからです。確か階級としては巡查だと思ったので」

迷わずに答えた綾花を祝福するかのように、裕貴とワックスが拍手した。

一年生っぽい幼い笑みを浮かべた綾花が、顔を紅潮させながら「ありがとうございます」と頭を下げた。

「完璧じゃん、文句無し。あいつらと比べたら雲泥の差だって。知識も外見も」

ワックスの褒め言葉に、もう一度、綾花は「ありがとうございます」と頭を下げた。

これだけの知識を見せつけられ、他の部員に歓迎されているのなら、認めないわけにはいかない。

「うん、合格。入部の手続きをとるよ。活動時間は放課後から……」

終了時間はまちまちだけど、始まって二時間くらいかな。まあ、暗くなるまでは帰れるよ」

「はい、よろしく願います」

こちらが気持ち良くなるくらいにの礼儀正しさを見せて、綾花は教室に戻っていった。

曲がる途中の角で、もう一回振り返るとお辞儀をする。

その様子をワックスが、鼻の下を伸ばしながら眺めていた。

「可愛いなー。一年生にもあんな子いるのなあ……亭主を支えて、家事に努める大和撫子って感じ？」

「亭主って！ 話、飛躍しすぎだろ。一年生だぞ」

ワックスの妄想癖に呆れながらも、十一朗は声を裏返して叫んでしまった。どうやら恋人第一号に認定してしまったらしい。

「放課後が楽しみだなあ……あのさ、プラマイ。刑事部長の息子としての推理はどうよ？ あの子、彼氏いそう？俺と彼女は脈あり？」

もはや、今のワックスに突っ込みは意味をなさない。

十一朗は全員出たのを見て、部室の鍵を閉めると、「自分の未来は自分でプロット書きしろよ」とだけ答えた。

2・事件発生

放課後 十一朗と裕貴が部室に入った時には、既にワックスの姿があつた。

いつもは散らかっているワックス専用の席が、今日は綺麗に片付けられている。

そして、隣の席も同じように片付けられ、どこから用意してきたのか『八木綾花』と書かれたネームプレートが置いてあつた。黒板には色とりどりのチョークで『新入部員、八木綾花ちゃん。大歓迎！』と書かれている。

こんなことを突っ込むのもなんだし……と思った十一朗は、敢えて見ないふりをして席に座った。

しかし、裕貴の方かというと何か言いたそうに体を動かすと、突然、机を両手で思いつき叩く。空気が震えるような轟音が室内に響き渡った。

そんな裕貴の剣幕を見て、十一朗とワックスはそのままの体勢で凍りついてしまう。

はしやぎすぎた……雷が落ちるに違いない。ワックスはそう感じて殴られるのを覚悟したのだろうか。既に目を閉じながら構えている。

ところが、

「ねえ、今日歓迎会やらない？ 八木さん呼んで、近くの喫茶店でさ……当然、代金は私達もち！」

逆鱗に触れたところか、妙な先輩ぶりを発揮させてしまったらしい。

裕貴は興奮して、「我ながら、いいアイデア」と自分を称賛した。更に手を叩き合つて、意気投合する裕貴とワックスを見ながら、十一朗は話を切り出した。

「まあ、案はいいだろうけど……一日目でそこまでの歓迎をされた

ら逆に困るんじゃないか？ 徐々に打ち解けあってから、そこで歓迎会が普通だろ？」

十一郎の冷静な判断に、裕貴は納得したように「そうかあ」と答え、ワックスはというと、

「そうだよな。初めは友達から……そこから恋人っていうのが順序だよな」

と、再び理解不能な飛躍妄想癖を発揮した。

十一郎は呆れて、もう突っ込むのをやめた。新刊の推理小説を開いて読み始める。

そこに、軽快な足音が近づいてきて部室の前でとまった。しかも、律儀に扉を二回叩く。

「開いてるよ」

新人生の登場にそわそわしているワックスを無視して、十一郎は声を上げた。

「失礼します」

言って綾花は入ってきた。手にはノートと筆記用具、警察関連本を数冊持っている。

それを見た十一郎は、思わず笑ってしまった。

「本当に警察関連のものが好きなんだな……」

「はい、東海林先輩が刑事部長さんの息子さんだなんて、私の憧れです」

意識しないで綾花は言ったのだろう。まず裕貴とワックスが息を呑んだ。続いて十一郎も動きをとめた。

十一郎は開いていた推理小説にしおりを入れて閉じると、綾花を見る。

「知っていたのか……」

押し殺したように呟いた言葉に、綾花が困惑した表情を見せた。

裕貴もワックスも、事の成り行きを見守っている。

刑事部長の息子 十一郎は父のお蔭で得た、その肩書きを好んではない。

だから、高校を卒業してからの進路は、大学で法律関係を学んだあとに決めると、漠然としたかたちのまま担任に伝えていた。

それを裕貴は知っている。ワックスも知っている。

綾花が十一郎の触れてはいけない部分を、一突きしてしまったということも。

先程までの賑やかな部室が静寂に包まれ、時計の秒針の音だけが室内に響いた。

皆が話し出すタイミングを窺っている。その状態が居た堪れなくなつて、逆に十一郎から話題を切り出した。

「そんなに警察関連が好きならさ……警視庁の見学ができるか、親父に聞いてみるよ」

緊張で凍り付いた空気が一瞬にして、融解するかのよう流れ去っていく。

ワックスが「どうしていいか、分かんなかったよ」と安堵の息をついてからばやいた。

まだ動けない綾花に裕貴が寄って行くと、彼女が持っている警察関連本を開いて笑った。

「見てプラマイ、すごいよこの本。蛍光ペンで重要なところ印してある」

裕貴が開いて見せた本は、確かに数色の蛍光ペンで綺麗にチェックしてあった。ただ好きというだけではここまでしないだろう。

綾花もようやく安心したのか笑顔を見せて、また「ありがとうございます」と言った。

その時だ。綾花の携帯が鳴った。面白いことに流れた着信メモデューは、最近視聴率が上位の刑事ドラマのオープニングだ。

「御免なさい。出ます」

皆の視線を気にしながら、綾花は携帯電話を取り出すと、相手に返事をした。

直後に、相手が何か話したのだろう。綾花の顔が一瞬で蒼白になつていった。

「えっ、警察？ はい……間違いないです。電車に？」

綾花は唇と声を震わせたかと思うと、電話を持つ気力すら失ったかのように視線を虚空に固定させたまま、その場に座り込んだ。誰が見ても正常な精神状態ではないと分かる。綾花の変わりように、隣にいた裕貴が気を遣って肩を抱いた。

電話を切った後も、綾花は体を震わせたまま動けない。

「どうしたの？ 私達にできることなら、何でも協力するから話して」

綾花の思考回路を混乱させないようにだろう。裕貴は優しい口調で綾花に聞いていた。

「電車に飛び込み自殺したって……」

綾花の衝撃の告白に、十一朗とワックスは顔を見合わせた。

部活動の最中に、警察から伝えられた飛び込み自殺発生という驚きの報告

まるで部員全員の混乱を具現化するかのように、授業終了から一時間がたったと知らせる鐘が、校舎内に喚声のように響き渡っていた。

3・謎の男

数刻経過しても、綾花の状態は変わらなかった。

目の焦点は定まらず、言葉をかけても反応を示さない。肉体から魂が切り離されてしまったのではないかと思えるほど、意識が閉ざされた状態になっていた。

「大丈夫？ 立てる？」

裕貴の声は聞こえたのだろう。顔を上げた綾花が自力で立ち上がろうとする。

しかし、彼女の意思を裏切ったように膝が折れた。裕貴が慌てて転倒しそうになった綾花を補助する。

これでは次の行動に踏み出せない。

そう判断した十一朗は、買ったばかりの携帯電話を使って、タクシーを頼んだ。

深刻な状態の綾花を一人で行かせるわけにもいけないので、ミス研部員全員が同行する。

着いたタクシーに乗車しながら「明鏡止水総合病院へ」と十一朗が伝えると、タクシー運転手は目を細めた。

顔面蒼白の少女に付き添う高校生数人が総合病院へ 頼まれたら誰でも、少女の身に不幸が起きたのだと感づくだろう。

運転手は重い空気を感じ取ったのか、一言も話しかけてはこなかった。交わしたのは運賃を払った時だけだ。

「ありがとうございます。お大事に……」

そんな運転手の言葉も綾花は聞こえていなかっただろう。車を降りた途端に倒れかけた。それを見た運転手が、慌てて車を降りて駆け寄ってくる。

「大丈夫ですか。途中まで肩をお貸ししましょうか」

サービス精神に溢れた大人の対応だ。ありがたい言葉ではあったが、裕貴が肩を貸したのを見て十一朗は断った。

綾花を宥めながら裕貴は入口のほうに歩いて行く。その時、十一朗は視線の先に妙なを見つけ、立ち止まった。

黒い車が一台停まっている。妙だと感じたのは無線アンテナがあることだ。

覆面パトカーに違いない。しかも、内装をどこかで見たような気がする。気のせいかもしれないと十一朗は思っ、裕貴の後に続いた。

十一朗の後にワックスがつくようなかたちで、ミス研一同は進む。受け付け前で裕貴が十一朗に目配せした。どこに運ばれたか聞いてくれということだろう。綾花に肩を貸した状態で聞けば、更に動揺してしまうかもしれないと感じての配慮だ。

十一朗はワックスと一緒に受け付けに近づいて、案内係に聞いた。「あの……先程、電車に轢かれたという男性が運ばれてきたはずなんですけど」

案内係の女性は一瞬、顔を強張^{こわば}らせた。無理もない。自殺しようとする関係者がきたとなれば、感情も表に出るだろう。

そう、ここは病院だ。誰もが怪我を治し、健康になろうと訪れる。命を断とうとした人間がくるのは、場違いとしか言いようがない。

案内係はノートを出すとページを捲り、十一朗にペンを差し出した。

「関係者の方ですね。では、一応ここにサインを。場所は三階ですね」

綾花がサインできそうにないので、十一朗は自分の名前と全員の人数を書いた。

すぐに裕貴と綾花のところに行つて場所を伝える。エレベーターに乗つて三階に着くまで、誰も口を開かなかつた。

三階に到着した音をエレベーターが告げる。まず裕貴と綾花が先に降りて、十一朗、ワックスと続いた。

その時だ。右手側から「うおっ」という妙な声が上がった。声の根源に目を向けると、黒スーツ姿の男が二人立っていた。

十一朗も裕貴もワックスも知った顔だった。警視庁捜査一課の刑事、貫野と文目だ。

彼らを見た瞬間、十一朗は頭を抱えた。貫野はというと、苦虫を噛み潰したような顔をしてこちらを見ている。

思いがけない場の思いがけない再会に、貫野たちを知らない綾花だけが反応を示さない。

「プラマイ、私、先に八木さんを病室に連れていくね。だからここはお願い」

貫野と文目にお辞儀をしてから通り過ぎた裕貴は、綾花を連れて病室へと入っていった。

一呼吸時間を置いて貫野は深い息をつく、十一朗に向かって歩み寄ってきた。心境はかなり複雑そうで、頭を掻きながら口を開く。十一朗も同時に口を開いた。

「何でここに居るんだよ？」

同じ言葉が違う口から出て重なった。貫野の部下の文目が目を細めて困惑の表情を浮かべた。

十一朗が貫野と文目と出会ったのは、公開自殺事件だった。犯人を突き止めるという互いの想いが一致し、行動を共にした仲である。

しかし、関係はというと仲間というよりも腐れ縁と喻えたほうがいい。

十一朗の推理力に貫野は競争心を持っているし、十一朗は貫野の口調が気に入らない。

協力して自殺屋を自首させた仲ではあるが、何故かまだギクシャクしていたりするのだ。

言葉が重なったので、互いに相手の出方を窺う。すると貫野が先に口を開いた。

「藪^{やぶ}から坊主^{やぶ}が出やがった……何だよ、お前ら。あの電話に出た子の関係者か何かか？」

綾花に電話連絡したのは、どうやら貫野だったようだ。

そういえば　と、十一朗は思い出す。病院の前に停めてあった覆面パトカーは他でもない。この二人組のものだ。内装を見た気がしたのも気のせいではなかった。

「ミス研に今日入部した子、新入生だよ。名前は八木綾花」

十一朗の説明を聞いた文目が手帳を取り出すと、メモを取り始めた。理解できない行動に、十一朗は不快感を覚えた。

「何でメモ取るんだよ？　と、どうか何でここにあなたたちが居るんだ？　自殺だろ？」

電車に飛び込んで自殺未遂　普通なら病室に刑事はいない。現場検証や目撃者に事故当時の状況を聞いて終わりのはずだ。事情聴取をするにしても自殺未遂した当人は意識がなく、とても話を聞ける状態とは思えない。疑問が残った。

十一朗の質問に、貫野が「答えねえわけにはいかないよな」と言っ
て、文目を見る。

文目も「そうですね」と手帳を手にしたまま同意した。

「目が覚めて、逃げられでもしたら困るから……俺達は張り込み
つてわけだ。同時に事情聴取して、自供させなきゃならねえ」

「自供って？」

思わず十一朗は声を裏返して叫んだ。隣にいるワックスも状況を
呑み込めずに瞬きを、これでもかというくらい繰り返している。

十一朗は息を呑んだ。貫野の一連の説明で、徐々に意味が理解で
きてきたからだ。

「何か、やったのか？　あの人」

もはやそこに、安穩とした空気は一片もない。張り詰めた空気だ
けが存在する。

「ほんとにお前は憎たらしいガキのくせに、呑みこみが早くて楽だ
な……殺しだよ。奴の左後ろポケットから遺書が見つかった。『私
が殺しました。申し訳ありません。責任を取って死にます』ってな
相手の左後頭部を鉄パイプで殴った後、鋭利な刃物で腹に一回、最
後に倒れこんだところでグサリだ……致命傷は最後の一突きで、傷

は心臓の大動脈にまで達していた。まっ、殺意は十分だし、それで観念して自殺決めこんだんだろ」

都合よく貫野は遺書を持っていたのか、証拠品袋に入った証拠を見せびらかすように十一朗に見せる。

確かに紙には貫野が言った通り、『私が殺しました。申し訳ありません。責任を取って死にます』と書いてあった。遺書は書類のよいうな紙ではなく、何かを切り取ったような粗末なものだ。しかも、奇麗に折り畳まれたというよりも、潰したような皺が残っていた。取り扱いは乱雑だったのではないだろうか

そして、右上の文字の一部が擦れて欠落していた。

身を乗り出すように見定めた十一朗を見て、貫野が慌てて遺書を懷に隠す。

「くっそ、この野郎。また変な癖見せやがったな……もう何も教えてやんねー」

いい年した大人の絶対言わないような、子供じみた口調で言う。十一朗は反応に構わず目を細めながら、遺書を入れた貫野の懷を見つめた。

「それって、本当に遺書？」

十一朗に問いかけに、貫野はあからさまに面倒臭そうな息をつくと睨みつけてきた。

「お前な。電車で飛びこむ瞬間を見た目撃者が、奴が何かをポケットに入れたと言っている。だから誰かが画策したとかはねーよ。真正銘の遺書だ」

「ふーん……」

はつきりしない十一朗に貫野は痺れを切らしたのか、落ち着きなく体を揺すった。

そして、禁じ手と自分で踏んでいたはずであろう疑問を、十一朗にぶつけてくる。

「何か、引つかかってんのか？ 聞いてやるから言ってみろ」

貫野の言葉を聞いて、後ろにいた文目が吹き出した。貫野は振り

返らずに、後ろ蹴りを文目に食らわせる。

「いや、どう考えても変でしょ……あと気になることがあるから確認に行く」

十一朗は、貫野と文目がじゃれているのを無視して、病室の中に入った。

貫野と文目、ワックスも慌ててついてくる。何が『変』なのか知りたいようだ。

しばらく時間を置いたのが幸いしたのか、綾花は落ち着いていた。顔色は正常になっているが、まだ瞼は腫れていた。

十一朗は意識のない男の左側にしゃがみ込んだ。そして男の左手を取る。綾花と裕貴は十一朗が何を始めたのかというように、不思議そうに見つめていた。

「やっぱりそうだ……貫野刑事、これが証拠。左手の小指に黒いインクが付いてる」

「証拠だあ？ 何の？」

貫野は十一朗と同じように、男の小指に付いている黒いインクを確認する。

が、意味は理解していないようで、頭を乱暴に掻きながら立ち上がった。

そんな貫野たちを促すように、十一朗は病室の外を指差す。

「じゃあ、説明するよ。取り敢えず病室から出て。それと文目刑事、さっきのメモの紙とペン貸して」

病室から出た十一朗は文目に手を出しながら頼んだ。刑事部長の息子という権限があるからか、貫野が睨みつけたからか、文目は手帳の紙を破るとペンと一緒に十一朗に渡す。

文目が手渡してきた物を受け取った十一朗は、懽然とした表情でいる貫野に差し出した。

「今から実践するよ。犯人は相手の左後頭部を鉄パイプで殴打……貫野刑事、犯人役を普通にやってみてよ。被害者の代理は文目さんに任せるからさ」

十一朗の指示に貫野は「ああっ？」と声を荒らげた。すぐに舌を鳴らして反論する。

「なんで俺が……それにお前が言いたいことは大体分かるよ。相手の左後頭部を殴打。つまり犯人は左利き。そう言いたいんだろう？」さすがにこれは貫野も気づいたらしい。凶器が絡んだ殺傷事件が起きた場合、切りつけられた方向で犯人の利き腕を判断することが多い。それは基本といってもいい。

犯人が右利きで正面から切りつけた場合は、傷は被害者から見て左上から右下の斜線状になる。左利きならその逆だ。それは棒を使つての攻撃も変わらない。

相手の背後から襲いかかり、左後頭部を殴打したのなら犯人は左利きだ。

「遺書を書いた時、インクは乾いていなかったはずだ。証拠に遺書の文字が擦れていて、あの人の左小指に付いていた。つまり、その場で慌てて書いたつてこと。相手を刺し殺して、すぐに遺書を書き、逃げきれないと踏んで電車に飛び込んだ……」

そこで十一朗は一段落おいた。一気に話すと整理できないだろうと思つたためだ。

「それで、文字が擦れていた遺書を見て、奴の手を確認しやがつたのか」

貫野は先程の十一朗の行動を語ると、腹立たしそうに齒噛みした。

「はい、犯人は左利き。その場で遺書を書きながら歩いてよ。あつちが踏切」

実践しろと言われた貫野は、その代理を無理やり文目に押しつけた。

変にプライドの高いこの男は、犯罪者であり自殺した男の真似を自分がするのが許せないらしい。

嫌そうな顔をする文目を相手に、貫野が「行け」と言うように目配せで合図した。

「何で僕が……」文目はそう言いながら、渋々歩き始めた。犯人は

左利き　実践なので左手にペン、右手に紙切れを持ちながら、文目は文字を書き込んでいく。

左利きではない文目は遺書を書くのに苦戦していたが、十一郎が踏切と指差した通路の突き当たり近くまで進むと、動きをとめた。書き終えたけど……というような素振りを見せて振り返る。

「書けたなら、前の話を踏まえて動いてみてよ。左小指に書いた遺書の右上のインクを付けて、遺書を握り潰してから、左後ろポケットに入れる」

十一郎の指示に貫野がまず気づいて「そうか」と叫んだ。文目もどうすればいいのかわからずに四苦八苦している。

そう、どう考えても左利きでは一連の作業がうまく出来ないのだから、右利きなら、容易にこの作業を完了できる。

「奴は右利きか。で、殴った奴は左利き……どうなってるんだ？」

証拠はある。『私が殺しました。申し訳ありません。責任を取って死にます』という遺書が　ところが、遺書を書いた本人と相手を殴った者の利き腕が違う。

「あーっ、くそっ。また掻き回してくれやがって……どうやら高校生名探偵殿は、相当、俺達に仕事を与えたいらしいな」

自らの頭を乱暴に掻き回した貫野は、重い息をついた。手は煙草を探そうとしているが、ここは病院内だ。禁煙だと気づいたのか手を下ろした。

その時、病室から裕貴と綾花が出てきた。

先程見せていた動揺が嘘のように、綾花は落ち着いていた。自力で歩き、流していた涙も腫れていた瞼も感じさせないほど、冷淡な表情に変わっていた。

綾花の様子を見て十一郎は矛盾した印象を持った。変わりすぎているのだ。天使が悪魔になったのか、今鳴いたカラスがもう笑ったのか

貫野も不審感を抱いたのだろう。意識してなのか、真正面から話しかけるのではなく、綾花を横目で睨むように話し始めた。

「電車に飛び込み自殺して、大した怪我もなく生きているんなら奇跡だな。どうやら頭を打って倒れこんだらしい……うまいこと線路の真ん中に倒れこんで、電車と地面の隙間に挟まれた。気絶したから助かったようなもんだ。そこで変な動きをしたらお陀仏だった」言葉を選んで貫野は話したのだろうが、相変わらず口調は荒い。しかし、綾花は説明を真剣に聞いていないように見えた。

本題に入るつもりなのだろう。貫野が大きく息を吸う。

「で、隠す必要もないから、単刀直入に聞かせてもらおう。奴の名前と住所を教えてくれ。身分証も持ってないし、前歴もないみたいで困ってたんだよ」

貫野の質問に綾花は顔を上げると、首を大きく横に振った。

「言えないってのか？ 隠すと警察行くことになるぞ」

貫野の忠告に、また綾花は首を横に振る。そして、皆が耳を疑うことを告げた。

「知らないんです。私はあの人を知らない……一体、誰なんですか？」

全員が顔を見合わせた。

『私が殺しました。申し訳ありません。責任を取って死にます』の遺書を残した謎の男。

そして、利き腕違いの謎

謎の男と接点がないはずの新生八木綾花に伝えられた、自殺未遂事件

今回の事件も簡単には終わらない。

場にいる全員が難事件になると確信した中、文目が困ったような声を上げながら、掌に握っていた紙を後ろポケットに押し込んだ。

部下の妙な動きが気になったのか、貫野が文目の腕をつかんで紙を取り出す。文目は変な抵抗をしたが、貫野の権力には及ばなかった。

取り出された紙は、自殺未遂をした男の行動を実践した文目の遺書とされるものだ。

貫野は文目が書いた遺書を開いた。十一朗も気になって覗きこむ。すると、そこには

『上司との付き合いで疲れました』という妙に現実的な内容が記されていた。

十一朗が、これ絶対に殴られるなと確信したと同時に、貫野の渾身の右手刀が文目の脳天に叩きこまれていた。

4・追撃

飛び込み自殺をした男を知らない。

綾花は質問とも思えるような発言を終えると、口ごもってしまった。男の素性を本当に知らないのか。それとも隠したいだけなのか。その胸中は口を閉ざしている本人しか捉え切れないものであると同時に、追及して吐かせないことには分かり得ないものだ。

相手は高校一年生の女子。無理に聴取するのは、貫野も気が引けるのだろう。

貫野は手袋をはめた手で袋に入った紙を慎重に取り出すと、綾花の前に突き出した。

「分かるか？ この紙には数字が書かれていた。これが電話番号だと気づいてかけたら、あんたの携帯に繋がった。で、ここに呼び出したってわけだ」

貫野の説明が終わるまで、綾花は視線を床に落とし続けていた。裕貴が促すように綾花の耳元で小さく囁く。

「大丈夫。信頼できる刑事さんだから、知っていることは全部教えてあげて」

横にいた十一郎には、はっきりと裕貴の声が聞き取れた。貫野には聞こえたのだろうか。何の反応も見せていないので聞こえていないのだろう。

しかし、優しく促されても綾花は首を横に振った。

男を知らないというのは、事実なのかもしれない。

十一郎は確信した。これ以上聞いても彼女は何も話せないのだろう。

「分かった。じゃあ、もう何も聞かないよ」

十一郎の言葉を聞いて、貫野が「おいおい」と割り込んできた。

『また刑事面して、事件に首突っ込んでくれる気かよ……』それが貫野の言い分に違いない。

「知らないって言っているんだから、もう聞くなよ。時には紳士的に行動しないと、貫野刑事、いつまでたっても結婚できないぞ」

十一郎の戒めに貫野はこめかみを引き攣らせ、ほぼ同時に文目が腹を抱えて笑った。

静寂包む病院内なので、少しでも声が大きければ非常に目立つ。

患者の検診時刻なのか、病室から出入りを繰り返していた看護師が、鬼の形相でこちらを睨みつけていた。

部下の失態で恥をかいたのと、凶星を刺されたのが相当気に入らなかったのだろう。

貫野は積もり積もった十一郎への怒りを発散させるかのように、文目の頭を手帳で叩く。

毎回、十一郎は感じている。父が刑事部長でなければ、とつくに貫野は暴行を仕掛けてきていて、裁判沙汰になっているだろうと顔を上げた綾花は貫野に目を向けると、冷静に思い出すかのように語り始めた。

「電話で内容を聞いた時には、母が飛び込み自殺をしたものだったんです。だけど、寝ていたのは知らない男のかたで……」

納得しきれしていないのか貫野が妙な舌打ちをする。刑事というより悪人にしか見えない。

十一郎は相変わらずの、いい加減な判断と行動に呆れながら貫野を見た。

「どうせ電話で詳細語らなかつたんだろ。あんたの親が飛び込み自殺したって、言つたんじゃないか？ 『あんたの携帯番号を持っていた男が、飛び込み自殺した』って言わなきゃいけないのに」

しかし、貫野が綾花に伝えた内容も納得がいく。

男は身分証を所持してはいなかった。それなのに、遺書以外に綾花の携帯電話の番号が書いてある紙を持っていたというのだ。二つを合わせて考えると、近親者であると思いついても仕方がない。

しかも男は意識不明の重態だ。気を遣って、詳細を語らなかつたとも言えるだろう。

が、詳細を語らなかったのは貫野の落ち度でもある。そのために綾花はショックを受けて、言葉も話せない状況になっていたのだ。

十一朗の言葉が図星であり、反省点もあるのだろう。貫野は一步引いて言葉にならない唸り声を出した。

すると、今度は逃げ場を失ったのか、十一朗たちミス研全員を追い払うかのような手の動きを見せる。

「あー、分かった。全部信じたわけじゃないが、今回は放免だ。また事情聴取するかもしれないが、全ては他が繋がってからだ。ほら、行け」

行けと言われても、十一朗たちが全面的にいうことを聞く必要はない。

「裕貴、八木さんを送ってあげてくれ。俺はもう少し、ここに残る」
十一朗の発言に、まずワックスが動揺した。自分はどちら側につけばいいのか、選択し兼ねているのだ。

迷った拳句、不機嫌そうに睨みつける貫野と目が合い、ワックスは裕貴のほうについた。

「じゃあ、帰るね。貫野巡査部……じゃなかった。警部補を困らせたら駄目だよ」

途中で失言したことに気づいた裕貴が慌てて訂正するが、完全に周りには聞こえている。

反射的にかというか貫野は、部下の文目に視線を向けて拳を握り締めた。また叩かれては困ると、文目は笑いを堪えるのに必死になっている。

裕貴たちがエレベーターに乗って姿が見えなくなるまで、十一朗と貫野、文目の三名は黙り続け、三階を示したランプが一階になったところで、ようやく向き合った。

まず、先制攻撃とばかりに十一朗は貫野に話しかけた。

「父さんに聞いたよ。貫野警部補、主任になれるかもしれないんだって？ 何か、退職する人があるから、棚ぼた昇格だって……」

「棚ぼたって言うな。努力の賜物だよ」
たまもの

「ああ……貪欲の棚もののね」

「棚ものつて。どこまで棚ぼたネタ引っぱるつもりだ！」

この言葉の応酬戦に我慢仕切れなくなった文目が、また吹き出した。どうやら十一朗と貫野の漫才は、彼の笑いの壺に嵌まってしまったらしい。

また同じ看護師が違つ部屋の患者の検診を終えて出てくると、こちらを睨みつけてくる。

貫野は静かにしろというような素振りで、指を自分の唇に当てた。しかし、一番騒いでいたのは貫野だろう。十一朗は呆れて息をついた。

「あのさ、意識不明の男の素性はわからないとしても、殺された男との接点があったはずだろ？ 殺されたのつて、どんな人だったんだ？」

十一朗の質問に貫野は答えない。どうやら黙秘を決め込んだ様子だ。

代わりに、文目が手帳を開いて説明を始めた。

「暴力団組員、ますだりゅうじ升田龍治です。前科八犯。傷害、麻薬、賭博、偽造、銃刀法違反……何か、やってない罪はないって感じですね」

文目が遠慮なしに語るのを見て、もう隠すのも疲れたというように貫野が続けた。

「俺達一課だけじゃない。四課……今は組織犯罪対策部、主にマル暴を扱う課だが、そいつ等の中でも、知らない奴はいない有名人だった。俺らは奴を綱渡りつて愛称で呼んでた」

マル暴は警察用語で暴力団を差す。昔は暴力団を取り扱う課は四課だったが、現在では組織犯罪を取り扱う課、組織犯罪対策部として動いている。

刑事部でいう捜査一課が証拠や証言を求めて駆け回るコマネズミと喩えるなら、組織犯罪対策部は威圧と頭脳で相手を恐れさせる大猩猩軍団うじようぐんといってもいい。警察内部を知る者は、捜査一課より組織犯罪対策部の方がエリートという者も多いのだ。

そんな組織犯罪対策部と捜査一課全員が知るほどの男だったのなら、遺体を見た瞬間に全員が「こいつは」と言っただけに違いない。

十一朗は殺された男の素性を頭の中で整理すると、貫野に質問を続けた。

「綱渡り？」

「ああ、罪を犯しても殺人はしない。死刑や無期をかわしてギリギリの罪を重ね続けているから綱渡りだ。皮肉なことに今回は綱から落ちたんだろうが……俺も事情聴取をしたことがある。むかつく奴でな。取調室や法廷では、アホなくらい反省した態度見せるのに、シャバに出たら狂人になる。ま、怨む人物を数えたら星の数ほどいるだろうな」

暴力団組員と一般人が何かしら争っていたとしたら、それは金銭が絡んでいたと考えたほうがいいだろう。多額の借金をした男が、金の返還を要求されて凶行に走る……一番、理にかなった動機だといえる。

「そこからあたったら、あの謎の人の正体はわかるはずだろ？ 升田って人、組にいたのなら顧客リストもあるんじゃないか？」

十一朗の言葉に、貫野と文目が目を合わせて妙な顔をした。どうやら既に手は伸ばしているらしいが、何か様子がおかしい。

「奴、組を抜けていたんだよ。組の連中は抜けた奴の客なんか知らん。奴に貸した金がまだ残っている。奴の客知ってるのなら教えてくれって、逆に怒涛の応酬されてな。どうやら仲間には、纏まった金が手に入るとは言っていたらしいが、客の名前は伝えていなかったらしい」

一通り説明し終えた貫野が、威張り散らしたように仰け反った姿勢を直すと、十一朗に迫った。

「それよりも教える。あの一年生、出会い系サイトに手をつけたりしてないか？ どうも、知らないなんていう話は信用できねえ。男が女に金をつぎこんでいた。その返金を迫られて、二人で升田を殺したという話になれば、全てが繋がる」

十一朗は、貫野の早急過ぎる推理に呆れた。

人を見たら疑え　それは刑事たちの中にある暗黙の了解でもある。だが、本当か嘘かを見極める眼力も必要だ。

出会い系サイトで知り合った意識不明の男を見て、高校一年生の女子があそこまで冷淡な態度で会話を続けられるのだろうか。

しかも、綾花が病室に入った時には裕貴が肩を貸している。

普段天然の裕貴も女性だ。女の勘が鋭くて驚くことも多い。綾花の微妙な変化を見逃すはずがないと感じた。

「それは絶対じゃないよ。それに頼むから、変な質問を彼女にしないでくれ。刑事ドラマが好きで、警察に憧れてるんだってさ。一人の刑事のせいで変な印象与えたくないだろ……それよりもすべきなのは、あの謎の人の素性捜査！」

十一朗の指示に、貫野はあからさまに面倒臭そうに顔をしかめた。「そんなとこ調べてたら、埒があかねーよ。奴が目を覚ますのを待ったほうが早い」

貫野が言い切ったところで、エレベーターの到着音が響いた。見ると二人の若い刑事がこちらに来る。

「貫野さん。死んだ升田の所在地が分かりました。ただ、同居人がいるようです」

刑事の一人が貫野に耳打ちしたが、十一朗を見て口を閉ざした。

一般人を前に、情報を語ってはいけないという判断だろう。

しかし、説明した刑事の隣にいたもう一人が、十一朗の顔を見て会釈する。

面識のない刑事のはずだ。十一朗は不思議に思いつつも頭を下げた。

「東海林刑事部長の息子さんですよ……あの見識は、私も勉強させていただきました」

十一朗は思い出した。久保の事件の時にいた刑事だ。

十一朗と裕貴に『彼女の両親が君達に会いたいと言っているから、現場に残っていてくれ』と引き留めた人物。

それにしても……と十一朗は思う。一見というものは恐ろしい。噂だけだと、喧嘩腰で入部させると言ってくるのに、事実を見ただけで大の大人が頭を下げてしまう。

十一朗がただの部外者ではないと捉えてか、刑事は中断した話を語りはじめた。

「その同居人が俵井らしく……ここは張るので、貫野さんは現場に行ってくださいませんか？」

刑事の言葉を聞いて、貫野が「俵井か……」と呟いた。

「あいつ家に居ねーだろ。朝から晩までお勤めだしな……ま、確かに俺なら奴が立ち寄りそんな場所の見当はつくわ。なら、後はよろしく頼む」

その場を他の者達に引き取らせて、貫野が歩き出した。文目も手帳をしまいながら追いかける。便乗するように十一朗も続いた。

「何でお前がついてくるんだよ。あっち行け、シツシツ！」

当然、貫野は十一朗がついてくるのを善しとしない。しかし、十一朗には秘策があった。

「あのさ、ちよつと気になることがあるんだ。殺害現場の血痕に変な点とかなかった？」

「ねえよ。それにそれは鑑識の仕事だ。お前しつつこいぞ。煙草と酒と刑事面は大人になってからだ」

十一朗を撒こうと貫野は足早に歩いているが、先にあるのはエレベーターだ。待ち時間で簡単に追いつく。十一朗は追撃した。

「ないわけないだろ……何で探さないんだよ。それがあれば真相に近づけるかもしれないのにさ」

貫野はエレベーターが到着音を鳴らして開いたというのに、動きをとめて振り返った。

求めていた反応を見て、十一朗はしてやったりと胸中でガッツポーズをする。

「よし、分かった。どうしてもというのなら聞いてやるから、言ってみろ」

「俵井つて……どんな人？」

言われて十一朗はわざと惚けた。貫野は齒噛みすると、こめかみに青筋を浮き出させる。

「この野郎……神様が許さなくても、世間さまが許すなら、俺はお前を殴つてゐる」

「そんなに怒らなくてもいいだろ。連れてくのはタダじゃんか。前に取引したし、その延長線上だと思つてくれればいいからさ」

聞いた貫野が十一朗の胸倉を掴んで、エレベーターに乗せた。文目も後からついてきて、閉のボタンを押す。扉が閉まると、降下感と共に二階を通過する。

そこで貫野は煙草の箱を出しながら、口を開いた。

「お前は一度、親御さんに叱つてもらわなきゃ駄目だな……終わつたら、絶対に電話してやる。覚悟しとけよ」

遠回しではあるが、その応えは貫野が十一朗に同行を許したことを示していた。

「けどな、俵井も元暴力団組員だ。だから出しゃばった真似はすんなよ。お前は社会科見学にきた高校生。いいな」

刑事部長の息子が、元暴力団組員に刺されたなどという一大事が起きたら、簡単に一刑事の首など飛ぶに決まっている。

それでも十一朗の同行を貫野が認めた理由は、前の事件の功績があるからに違いない。

エレベーターから降りて車に辿り着くと、文目が運転席、貫野が助手席に座った。十一朗は自ら扉を開けて後部座席に座る。これが覆面パトカーでなかったら、完全に十一朗は注目の的だ。

貫野が部下に耳打ちされた住所を文目に伝えると、車は静かに動き始めた。

外観では覆面パトカーとは誰も気づかないだろう。しかし車に入ると、世間と離れた別世界だ。時折、無線連絡の会話が入ってくる。貫野は我慢していた煙草を一本出すと、遠慮なしに吸い始めた。密閉された車の中で、高校生がいるのに堂々と煙草を吸うのは、

刑事にしてみたらどうかと十一朗は思う。まるで当たり前のように、文目が運転しながら窓を開けた。

「後ろにガキが一人いるつてのが、落ち着かねえ……一人で乗せねえからな」

貫野のぼやきに、文目が微かに笑って「普通なら護送ですからね」と答えた。

捕まえた犯人を乗せた時は逃げると困るので、当然、隣に刑事が一人つくことになる。後部座席に刑事でもない者が一人乗るなどということは、ほとんどといっていいほどない。

「俺は何度かあるよ。けど、父さんの乗ってた車より、こっちのほうが席硬いかも」

さらりと言った十一朗を相手に、ミラーに映っている貫野が目を細めた。

「悪かったな……どーせ俺らはキャリア組じゃねーよ。ちよつと待て、ここで停める」

目的地に着く途中で貫野が文目に指示した。困惑した表情で文目が車を停める。

「ここで待つてろ。この時間帯は、ここが一番出るんだ」
言って貫野は車を降りると、視線の先にあるパチンコ店に入ってしまった。

貫野が言った「朝から晩までお勤め」の意味は、どうやら俵井はパチンコ店の常連客ということらしい。

それにしてもと十一朗は思う。一番出ると分かっているのだから、貫野もこの常連なのかもしれない。

無言なのが気になったのだろう。文目がちらりと十一朗を見た。
「先輩、暴力団組員の事情聴取もよくやってるから、そっち系に顔がきくんですよ。イタチの貫野って呼ばれているみたいですけどね」
「イタチって……」

十一朗は座席に深く腰かけた。イタチは隠語で『素早い刑事（巡查）』の意味だ。階級を言われるのを嫌う貫野なので、その愛称は

きつと不本意に違いない。

その時、一人の男がパチンコ店から転ぶのではないかという勢いで飛び出してきた。直後に貫野が追いかけるように出てくる。

それを見て文目は降りようとしたが、十一朗を見た。いくら刑事部長の息子といっても、覆面パトカーに一人、置いておくわけにはいかないからだ。

「車出して！ 繁華街に逃げる気だ。行く手を車で塞ごう」

十一朗に言われた後の文目の行動は早かった。アクセルとブレーキ、ハンドルを機械的に動かしてユーターンし、繁華街側に走らせる。この技術は貫野と常に行動することで叩き込まれた、彼の特殊能力なのだろう。

俵井と貫野は網のように入り組む小路に駆け込んでいた。

十一朗が窓を開けて二人の位置を確認しようとする、貫野の怒鳴り声が聞こえてきた。こうなると、いつも煩い貫野の地声は役に立つ。

貫野の怒号を頼りに、十一朗は文目に車の向かう方角を指示した。追いかけられた時、人間は無意識のうちに逃げる方向を選択することが多い。左折する可能性が高いのだ。血液を循環する重い臓器、心臓が左寄りにあることと、軸足が左足であることが理由ではないかといわれている。

そんな計算された予測と追い詰めによって、一本の路地に車を駐車した途端に、俵井が突っ込んできた。慌てて逃げ場を探そうとしていたが、追いついた貫野が車の側面に叩きつける。

体がぶつかる鈍い音と共に、俵井が言葉にならない唸り声を上げた。相当の衝撃だったのだろう。苦痛で顔を歪ませながら、貫野に目を向けた。

「ちよっ、待てよ。まだ俺は何もしてねーよ」

逃げ切れないと観念したのだろう。俵井は弁解を始めた。俵井の腕をつかんだまま、貫野が睨みつける。

「じゃあ何で、俺の顔見て逃げやがった」

「あんた、俺の顔見たら、いつもおつかねえ顔して追いかけてくるじゃないか！ それ見て逃げない奴なんていねーよ」

貫野は「まあ、そりゃ否定できないわな」と言つて、俵井を放した。

しかし、ちゃんと逃げ道は塞いでいる。

「その様子じゃあ、何も知らないみたいだな。升田が死んだ。お前、何か知つてたら教えろ」

貫野は懷から煙草を取り出すと銜えた。対し、衝撃の事実を聞いた俵井は動揺する。

「死んだ？ 殺されたんっすか。誰に？」

貫野が吐き出した煙草の煙が、開けていた窓から車内に入り込んでくる。十一朗は煙たくて噎せてしまった。

現実を受けとめきれずに混乱している俵井に、貫野が自分の煙草を差し出す。

一本受け取つた俵井の煙草に貫野が火を点ける。すると、ようやく一服して落ち着いたのか、静かに語り始めた。

「まいったな……俺、あの人に五十万貸したままなんっすよ。組にも借りたまんまらしいし。今日纏めて返してくれる予定だったんですけどね。やっぱ、殺したのって客っすか？」

自分が捕まらなないと安心したのか、途端に流暢に語り出す。貫野は話を続けた。

「殺されたつて、悩む時間もなくて言いやがったな。客の名前言つてなかったか？ あと、幾ら返つてくるとかは？」

「名前は聞いてないっす。客の名前を聞かないのは俺らの中にある暗黙の了解っつか、横取りがあるかもしれないから、話しませんつて。金は本当か嘘がよく知らないけど、七百万つて……他にも金蔓^{つま}見つけたから、一億はくだらないつて言つてました」

「一億？」

俵井の言葉に、貫野だけでなく文目と十一朗も声を裏返して叫んだ。

一通り驚きの行動を見せた文目はハンドルを握りながら、もう片方の手で指折り数えている。自分の月給に換算すると何年分なのか、皮算用しているのだろう。

「ありえねーでしょ。だから、殺されたって思ったんすよ……」

俵井は煙草を一気に吸うと、十一朗を見た。何でここに高校生が？ と、異物を見るような目だ。貫野が話を続けろというような素振りを見せると、俵井は煙を吐き出した。

「何年か前の貸しだとかで……どこまで本当か分かんないっすけどね。あの人、ホラも多かったから」

『綱渡り』死刑や無期をかわしてギリギリの罪を重ね続けている『取調室や法廷では、アホなくらい反省した態度見せるのに、シャバ出たら狂人になる』

その話が升田は生粋の『ホラ気質』だと裏付けている。升田が得意気に話す中に、真実など一欠片ひとかげらもなかったのかもしれない。

しかし、今回は本当だったのだろう。殺される　その動機は相当の代物だったに違いないのだ。

これから事件をどう掘り下げて行くのか、思考を始めた貫野を見て十一朗は顔を出した。

「あのさ。升田の持ち物調べさせてもらったら？　家宅搜索を……」
「令状は？」

一即答したのは貫野ではなく俵井だった。その反応を見た貫野が、俵井の肩を抱くと不気味な笑みを浮かべて迫る。

「俺がまっとうな刑事じゃないってことは、もう理解してるよな？　訴えなら後で聞いわ。調べさせる。偽造カードか？　麻薬か？」

俵井は慌てて首を横に振って否定した。墓穴を掘ったのだ。もはや言い逃れはできない。

貫野は携帯を取り出すと、連絡を始めた。家宅搜索のついでに俵井の隠し財産も見つけてしまおうという寸法だろう。

観念した俵井は、借りてきた猫のように大人しくなり、肩を竦めて縮こまっていた。

仲間を呼んで、ある程度の算段をつけた貫野は、後部座席にいる十一郎に視線を向けた。

「おい、高校生名探偵君。さっきの話の続きを聞かせてもらっぞ」「聞いてきた貫野に十一郎は迷わず答えた。

「じゃあ、事件現場へ」

5. ゲソコン

十一郎が現場に着いた時には陽も落ちて、周囲は闇に包まれようとしていた。

暗くなつてしまえば捜索活動は難航する。今日の捜査はここまできつめたのか、鑑識が撤収作業を始めているところだった。

車から真つ先に降りた十一郎は、その場で一回転しながら辺りを観察した。

殺害現場の路地を出て左折すると、謎の男が自殺未遂した踏切が見える。距離は約百メートルといったところだろうか。

刺した男の返り血を浴びたのだろう。謎の男が進んだ軌跡を示すように、赤い斑点が殺害現場と踏切を結んでいた。

十一郎は反転すると、現場に足を向けた。追うように降りてきた貫野が歩いてくる。

殺害現場で足をとめた十一郎は、その場にしゃがみ込んだ。死んだ男が残した血糊を、入念に観察する。

薄暗くなつてはいるが、路面に付着した夥しいまでの血痕は確認でき、事件の壮絶さを物語っていた。

十一郎の背後で貫野が「はあ」と疲れた声を出す。
「普通、高校生が死んだ奴の血糊を真剣に見るか？　ねーよ。もう、

どうにかしてくれよ。こいつのこと」

貫野の悲鳴を横に、文目も苦笑いをする。その時、二人とは違う足音が近づいてきた。

十一郎が顔を上げると、そこには久保殺害現場で会った鑑識の一人が立っていた。

「十一郎君、何か疑問でも？　こっちに差し支えないことなら話すけど……」

鑑識員の意外な言葉に、貫野のほうが目を見開いた。「ちょっと待て」と即座に割って入る。

「高校生相手におかしいだろ。いくら刑事部長の息子でも、それは駄目だ」

貫野の忠告に、鑑識員は間違ったことはしてないというように、逆に目を白黒させた。

「あれ、貫野さん、知らないんですか？ 五年前の話。刑事部長が非番中に現行犯逮捕した男がいたじゃないですか。あれ、十一郎君の助言があつたから出来たって話ですよ」

聞いた貫野と文目が同時に十一郎を見た。思わぬ話題の変換に十一郎は頭を抱える。

「あれは、俺が偶然気づいたってだけで、父さんでも見たら分かつたって……」

十一郎が中学入学を控えた頃だった。小さくなつた学習机を買い替えようという話になって、父と母と共に家を出た。

目的の学習机も望み以上の素晴らしい物が見つかつて、気持ち豊かに駐車場に向かおうとした時だ。目の前の交差点で、幼女が車に轢かれた。

頭から血を流し倒れ込んだまま微動だにしない。その場にいた誰もが幼女は信号無視で飛び出して轢かれたと思っていた。

しかし、即座に十一郎は近くにいた男を指差して、父に指示を出した。

「父さん、あいつが犯人だ。すぐに取り押さえて事情聴取して！」突然出された息子の発言に戸惑つた父だったが、男と目があつた途端、相手は逃げ出した。行き成り逃げ出した男を、疑わない刑事はいない。

その場で男は取り押さえられ、あつけなく自分がやつたと自供した。

「十一郎。なぜ、あいつが犯人だと分かつたんだ？」

聞いた父に向かつて十一郎は、何の躊躇もなく言い切つた。

「だって、あの子の背中に足跡グッドがあるじゃないか。あの足跡グッド、あの

靴のメーカーだよ。あの子の近くにいて、あの靴を履いていたのは、あいつだけだったから」

男は信号待ちをする少女の背後に立つと、車が来るのを見て蹴り飛ばしたのだ。少女の背中にある足跡が、はつきりとそれを示していた。

しかし、実はその足跡はタイヤ跡と重なっていて、判別が難しかったという。

翌日 新聞の地域欄に『小学校六年生の冷静な判断で、犯人が現行犯逮捕』という、恥ずかしいくらい大きな十一朗の写真と記事が載っていた。

母は「この子は私の誇りです」と喜んだ。しかし、父は前までは「刑事を目指すといい」と言っていたのに、この一件以来、十一朗の将来について一切語らなくなった。

父さんは俺と係るのが嫌になったのかもしれない。十一朗はそう感じていた。

夢は刑事だった。だけど、このまま父さんと話せないくらいだったら違う世界に

事実、十一朗が刑事に執着がないと知ると、父は障りなく話をするようになった。将来は探偵と決めたのは、そんな裏の事情もあったのだ。

十一朗の過去話を淡々と貫野や文目に話す鑑識員を横に、十一朗は路面を見つめた。

「鑑識さん、ちよつと疑問があるんだけど。自殺未遂をした人の着用物とか、見ることはできないかな？」

十一朗の要望に鑑識員は嫌そうな顔をするのではなく、逆に興奮したように鼻息を荒くし、着用物を映した写真を収めたファイルを持ってきた。

もはや、証拠大開放祭りだ。絶対に有り得ない状況に貫野が頭を抱えていた。

「これが着用物の写真ですね。実は僕にも疑問が……なので、僕の

推論と十一郎君の見解が同じか是非、お話を頂戴したい」

何が疑問点なのか、鑑識員は敢えて言わなかった。貫野と文目も覗き込む。

十一郎は前に予測した通りの違和感を捉えて、鑑識員を見た。

「致命傷は最後の一突きで傷は心臓の大動脈に達していたんだよね。それにしても浴びている血の量が少ない」

心臓は体内に血液を巡らすポンプだ。その心臓の中でも太い大動脈を貫けば、刃物を抜いた瞬間、夥しいまでの鮮血が飛び散る。

見せてもらった服の写真は、その血の跡がほとんど見当たらない。着用物に付着していなくても、路面には相当量の血の痕跡が残されるはずだ。それが現場にはない。

相当量の鮮血を浴びた者が存在する。そしてそれは、自殺未遂をした男ではない。

やはり被疑者とされる意識不明の男は主犯ではないのではないか。左利きの人物が主犯なのではないか。

「あと、ここに残った血の跡って、なんか変じゃないか？」

十一郎が指差した場所を見た鑑識員が、「やはり、そこに目を付けられましたか」と目上の者に語るような丁寧な口調で返した。

関心を示した貫野と文目が血痕を真剣に見つめる。が、何が変なのか分からないらしく、顔を上げると十一郎と鑑識員を見た。

「血糊を拭き取ったような跡があるだろ？ それとここにある円状の跡……これって、靴の跡じゃないかな」

十一郎の説明に貫野が首を傾げる。しばらくして「そうか」と声を出した。

「ハイヒールの踵かかとか」

言って貫野は自問自答の決着を脳内でつけたのだらう。息を荒げると十一郎を見た。

「犯人は女ということだな」

立ったり座ったり忙しいなと感じながら、十一郎は首を縦に動かした。

十一朗は確証を得るために、更に事件の奥底に迫ろうと考えた。

「あと殺された男の写真は？」

十一朗の質問に鑑識が答えるより早く、貫野は「そのことだけだよ」と続けた。

「あの綾花って子に升田の顔を知っているか確認してほしいんだが、これでもかつてくらい苦しんで死んだ顔しててよ。とてもじゃないが見せられねえ。だからお前も同じだ」

十一朗は貫野を見た。そしてまた呆れた。その反応に貫野が眉間に皺を寄せる。

「俺、なんかおかしいなと言ったか？ なあ」

後ろにいる文目が首を横に振って答えた。だが、その反応は間違っている。

「今の発言、監察医の前で言わない方がいいよ。これは監察医も言いたがらない知識なだけだよ。苦しんで死んでも安らかな顔になるんだよ。筋肉が弛緩するから……だけど唯一例外があつて、物凄い形相のまま死ぬ時があるんだ。それが『激しい怒りの中』で死んだ時」

文目が感心して息をついた。貫野は虚空を見ると抑え込んだ気持ちを発散させるように叫んだ。

「か……まじで、こいつどうにかしてくれ。高校生にここまで言われたら、自分が馬鹿なんじゃないかって思えてくる」

聞いた鑑識が高い声を上げた。しかし十一朗は推理が的中したことで天狗になるよりも、貫野の言葉で現実を理解した。

父さんが俺と係るのが嫌になった理由は、きっと。

あの日、男が犯人だと知って推理を語った時の周囲の目、父と母の驚いた表情。あれは凄惨という感服の目ではなく、近寄り難いという畏縮だったのではないか。

そんなつもりはなかった。言わなければ良かったのか。息ができなくなるのではないかと錯覚するほど、胸が締めつけられた。苦しみを耐え切れずに空を見上げた。

漆黒の闇の中に輝く星たちが語りかけてくる。

いつでも父の隣にいたいと考えてきた。優秀な刑事になりたいと背伸びをし続けた。

小学校低学年でありながらも、警察関連本に興味を示した。法医学、科学捜査、刑法……時を惜しんで読み漁り続けた。

そんな時に起こったあの事件

しかし、あの日から時はとまったままだ。自分の将来がつかめなくなってしまった。本当になりたいのは探偵なのだろうか。そんな疑問が浮かぶ時もある。

実際、現場にいられるのは探偵ではなく刑事だ。が、そこには十一郎の嫌う柵しがらみの世界がある。

近づいていた父との距離が、逆に一気に遠ざかってしまったという悲愴感。

空を見上げたまま十一郎は深呼吸した。だが、ここで立ち止まるわけにはいかない。

「本当に借金相手だけの関係だったのかな……何か違う気がする」
『激しい怒りの中で死んだ時』は憎悪のような感情が滲み出た時ではないだろうか。

殺された男と、とどめを刺した者の関係は、金の貸し借りでは収まらない親密な仲だったのではないか。

十一郎の中でいくつもの疑問が浮かんでは消える。難問に首をひねり続ける十一郎の横で貫野が唸った。

「くそ、関係者が全員『口無し』じゃ話にならねえな」

口無し 被害者は死亡、被疑者は意識不明、被疑者との関係が疑われる八木綾花も事件との関連を否定。捜査本部が開設されていたら、
口無し殺人事件捜査本部』となっても不思議ではないだろう。

「貫野警部補。この事件、安易な気持ちで臨んだら迷子になると思うよ。多分、意識不明の男は覚醒しても真実を語らない」

貫野が、文目が、鑑識員が、十一郎を一斉に見た。貫野が息を吞

んでから、十一朗に向かって聞いた。

「確証は？」

全員が十一朗の答えに注目する。満天の星空を眺めて精神統一した十一朗は答えた。

「刑事の息子の勘だよ」

両親が弁護士の実野は妙な笑い声を出すと、懐を探って煙草を取り出した。

が、現場保存を思い出したようで、大きな息をついてから隣にいる文目を殴りつける。

そんな二人を見ながら、きっと二人は何十年たっても変わらないんだろうなと考えて、十一朗は深い息を吐いてしまった。

6・肩書き

翌朝六時 目覚まし時計で数分狂わずに起床した十一朗は、いつものように一家団欒の食卓についた。

しかし、今朝はいつもと様子が違っていた。寡黙な父が新聞を開くことなく、十一朗を見つめていた。

ふと、十一朗の記憶から貫野の言葉が引き出された。

『お前は一度、親御さんに叱ってもらわなきゃ駄目だな……終わったら、絶対に電話してやる。覚悟しとけよ！』

忠告通りに連絡されたのだなと確信した。母も詳細を聞いたのだろう。席に着くことなく心配そうに事の進行を窺っていた。

「話は貫野に聞いた。また事件に首を突っ込んだそうだな……お前はまだ高校生だ。出しゃばった真似をするな」

父の叱責に十一朗は全身の血液が沸騰するような体温の上昇を感じた。

『出しゃばった』という言い方は癪に障った。思わず身を乗り出して父に反論した。

「俺が進路の話を始めるといつも話題をそらすくせに、問題起こした時だけ口出しすんのかよ！ 親父は俺の進路をどう思ってるんだ。あの日から何も聞いていないぞ！」

『お前は刑事に向いている』それが父の口癖だった。それなのに、あの日から『刑事』の文字すら父の口からは出ていない。

言い終わってから十一朗は我に返った。

面と向かって父に『親父』と言ったのは初めてだった。封印してきた本音を正面から叩きつけたのも初めてだ。全てが初めてづくし……
様子を窺っていた母が包丁を手に、直立不動のまま立ち尽くしていた。

テレビに映ったニュースキャスターが淡々と雲の流れと降水確率

を説明する声だけが、キッチンに響く。普段、和気あいあいとした憩いの場に、呼吸困難になりそうな張り詰めた空間が形成された。五年前を語らなかつたのは、父と母が決めていた暗黙の了解のようだった。

十一郎だけが外れ者になつていたのだ。この状況を打破しなければ物事は解決しないと十一郎は考えた。

あの日よりも自分は成長している。だが、人生の岐路という進路の場に立つて悩み続けてきたのも事実だ。今は背中を押してくれる両親の一言が欲しかった。

「コーヒーに砂糖は入れる？ グラニュー糖切らしちゃったみたいなのよね」

胃が痛むような重い父と子の対立を前に、母が降参の白旗をあげて話題を逸らした。

しかし、十一郎は引いた架線を切り落とすつもりはなかつた。

「母さんはどう考えているんだよ？ 俺は大学に行くけど、その先は気にならないのか」

親としてどうなんだよという言葉は控えた。

母は父に返答を求めるように視線を動かすと、十一郎に詰めた弁当を差し出しながら答えた。

「誰かの指図を受けて決めるものじゃない。あなたの将来はあなたが決めるものでしょ」

大人が辿り着くであろう、尤もな結論を母は語った。

十一郎が意識して控えた言葉。

親として……そう、自分は自分なのだ。将来を決めるのは親ではない。

父は母にも同意せず、我関せずと言った様子で新聞を開いた。それを見た十一郎は父の新聞を奪い取った。母が両手で口を押さえて声を上げかける。

「俺が刑事になったら、父さんはどう思うか聞いてんだよ。刑事部長の息子っていう肩書きを俺は嫌いだ。俺は俺だ。比べられる重圧

だって知ってる。本当は」

俺の求める進路は探偵なんかじゃないんだ……言いかけて十一朗は口を閉ざした。父の背中を追い続けてきてはいたが、現場で働く父の姿を見たことはなかった。

刑事の顔をした父を見たのは久保の事件が初めてだった。現れた威厳溢れる父の姿に息を呑んだ。

それは一瞬の出来事だったが、十一朗にとっては真剣に将来を考えさせられた瞬間となったのだ。

十一朗が奪い取って置いた新聞を丸めて手にした父は、カバンを取って立ち上がった。

その丸められた新聞で十一朗は頭を叩かれた。思わぬ父の行動に驚いて顔を上げる。すると、あの日から忘れていた父の笑顔があった。

「そうだな、お前はお前だよ。けれどこれだけは忘れるな。お前は俺の誇りある一人息子だ。それは何があっても変わらない」

聞いて胸が熱くなった。父は自分を避けていたわけではない。認めていてくれたからこそ、静かに見守り続けていてくれたのだと分かった。

安堵した母から手製の弁当を受け取った父は、再び十一朗に視線を向けて言った。

「親父と言われるのも、悪くないな」

父に声をかけようとした十一朗だったが、紡いだ文字を脳内で変更した。

「親父！ 仕事、行つてらっしゃい」

右手を上げて玄関を出た父の姿は、久保の時に見た威厳溢れるものとは違うが、更に大きく見えた。

7・利き手

放課後、都立明鏡止水高等学校、ミステリー研究部の部室で

「あんなことあったんじゃないかもしれないよな……」
ひどく落胆したワックスが、得意の鉛筆回しを適当にこなしながら言った。

裕貴も部室には来たが、色とりどりのチョークで書かれた『新入部員、八木綾花ちゃん。大歓迎』の文字を見ながら呆けている。

十一朗は持ってきた推理小説を開きながら、綾花が持ってきた入部届けを見た。事件があった直後のために、提出するかどうか悩んでいた。

「あれ？ プラマイ、今日は探偵小説じゃないのかよ。警察小説なんて珍しくね？」

突然、ワックスが鉛筆回しをやめて、十一朗に話しかけてきた。
推理小説に興味はないと思っていたが、十一朗が読む作品タイトルは気になっていたらしい。

「いや、読まないことはないよ。警察小説のほう警察内情や専門知識が詳しく書いてあったりするからさ。勉強にもなるし……」

「プラマイ、今朝、お父さんと喧嘩してなかった？ 隣まで聞こえてたよ」

話の途中で裕貴がいらぬ質問をしてきた。聞いたワックスが変な笑みを浮かべる。

「まじで？ お前も親父と喧嘩する時あるんだ。意外な一面発見だな」

十一朗は息をついた。勝手に親子喧嘩であると結論づけられてしまっている。

「似て非なるものだよ。進路について話をしただけ。さすがに三年生になったのに、大学に行って勉強するっていう考えだけじゃないけない気がしてさ」

十一朗の答えを聞いた裕貴が、黒板に近づいてチョークを取ると笑いながら言った。

「小説変えたのは心境の変化からかー。お父さん喜んだんじゃない？」

ワックスが十一朗を見た。幼馴染みだけに裕貴は全てわかってしまったようだ。それとも女の勘というものだろうか。この鋭さが推理に役立てばいいのにと十一朗は思う。

「喜んでいたのかな……よく分からないよ。親父って、いつも口数少ないからさ」

「えー、プラマイのお父さんって寡黙だからカッコいいんだよ。私のお父さんなんてお酒飲んだら弾丸トークとまんないんだもん。憧れのお父さんの姿だと思うけどな」

言いながら裕貴は立ち上がると、チョークを使って著作権侵害ともいえる、なんちゃってキャラクターを描き始める。ところが、途中で描くのを断念すると制服の袖を見て声を上げた。

「あーもう！ チョークで汚れちゃった。黒板に手を付けた私が悪いんだけどさ……」

汚れた手をどうすればいいか、裕貴は室内を眺めてからティッシュ箱を取っていた。

十一朗は裕貴の一連の動きで、綾花の入部届けの『あること』に気がついた。

「八木は右利きか……左利きじゃないんだな」

貫野は殺人事件の共犯者を八木綾花と疑っている様子だった。しかし、共犯者は左利きだろうという推測が出ている。

そんな十一朗の呟きを聞いた裕貴が、首を傾げて近づいてきた。

「ねえ、何で八木さんが右利きだっと思うの？ 会ったばかりでよく知らないのに」

ワックスも「そうだよな」と言って十一朗を見た。十一朗は綾花が渡した入部届けを机の上に置いて、文字を指差した。

「これ、書いた筆記用具はシャープペンだろ。入部届けってさ、横

書きと縦書きの用紙が一枚ずつあるんだ。こっちの横書きの文字は掠れてないのに、縦書きの文字は掠れているだろ？」

十一郎は手元にあつたノートを開くと文字を書いて実践した。

「手を付いて書くから先に書いた文字を擦っちゃうんだよな。横書きの時には右側に文字が存在しないから擦ることはないけど、縦書きだと右側に文字があるから擦ることになる」

裕貴が「あつ」と声を出した。

「さっきの私の落書きを見て気づいたの？　どういう思考転換でそうなるのよ」

十一郎は笑ってしまった。周囲の者の動きを見て引かなかった謎を解く。まるで推理小説の展開だ。

「裕貴の予測不能の動きに感謝だな。本当は八木に直接聞いてもいいんだけど、聞くより自分で問題を解決したほうがいい」

八木綾花は嘘をついていない。確証を自分自身で持ったことで十一郎は安堵した。

その時だ。ノックの音が二回響いた。

曇りガラスが張られた扉の向こうにある影は、紛れもなく新人部員八木綾花の姿だ。

「開いてるよ」

初日と変わらない入室の仕方だ。綾花は扉を開けて入ってきた。ワックスが感動したかのように目を閉じて全身を震わせているが、十一郎は無視した。

入室した綾花は視線を落したまま、顔を強張らせている。十一郎たちの一声を待っているようだった。

十一郎は推理小説を閉じると、綾花を見た。視線が交錯して彼女が目を見開く。知りもしない男との関係を警察に迫られて、疑心暗鬼に陥っているのが見て取れた。

「じゃあ全員揃ったみたいだし、活動開始するか」

いつもと変わらない進行が意外だったのか、裕貴とワックスが驚いて十一郎を見る。

綾花も緊張で硬直させていた体を動かすと、十一朗に駆け寄ってきた。

「あの！ 昨日のこと、何も聞かないんですか？ それに私、あの後、東海林先輩が刑事さんと何を話したのか気になって、ここに来たんです」

当然の反応だろう。十一朗は裕貴とワックスも見た。二人も興味深そうに身を乗り出している。本来なら捜査の進展を他者に語るべきではない。しかも八木綾花は殺人の共犯者と疑われている人物だ。しかし、十一朗は自身で導き出した推理から、彼女は犯人ではないと確信していた。

「分かった……隠しても仕方ないから正直に話すよ。警察は八木のことを殺人事件の共犯だと怪しんでいた。もしかしたら連行されるかもしれない。だけど、それは俺が全力で止めるよ。君は事件に関与していない。これは仲間意識からじゃない。確信だ。俺は八木を信じているし、君に協力していくつもりだ」

緊張の糸が切れたかのように、八木綾花の表情が緩んでいく。

そして、涙ながらに訴えた。

「本当に私はあの男の人を知らないんです。信じてください！」

警察の前で叫んだら、逆に怪しまれるような主張だ。十一朗は綾花を見た。

「そう言われたら、警察はアリバイを聞く。俺は君を犯人だと疑ってはいないけど、一応、確認していいかな。アリバイはある？」

綾花は首を横に振った。

事件発生は午後十一時、高校生が外出していたら確実に補導されてしまう時刻だ。家にいたというのが普通だろう。そして、アリバイは家族間では成立しない。刑事ドラマを見る綾花はそれを知っているに違いない。

「その時間は一人で自室にいました。だからテレビの内容しか言えないんです。母も仕事で留守でしたし……これってアリバイにはならないんですよね」

綾花の言う通りだった。残念ながらアリバイとしては不十分だ。殺人を計画した者は、自分が被疑者とならない方法を模索する。その中で捜査の対象からはずれる簡単な行動がアリバイ工作だ。

これを警察が警戒していないわけがない。刑事は誰であっても疑うことを前提に捜査に踏み切っているので、完璧といえるアリバイしか信じてない。

犯行時刻にどこかの防犯カメラに写っていたとか、多人数の第三者と会話を交わしたというほどでなければ無理だ。

テレビの内容なんて録画すればいいわけだし、子供が殺人を犯したのなら親も隠そうとするだろう。

刑法一 五条でも、親族間の特例として（犯人などをかくまい逃がす行為及び証拠隠滅）の罪は『犯人または逃走者の親族が犯人または逃走者の利益をのために犯したときには、その罪を免除することができ』とある。

刑事は当然、この刑法を知っているので親の証言を信じないのだ。「事件の時間帯じゃなくてもいいんだ。事件現場と君の自宅は距離が離れているから、自宅周辺のアリバイなら十時半でも成立だ」

十一朗の質問に綾花は「あっ」と声を出した。何かを思い出したのは確実だった。

「飲み物を買いにコンビニに行ったのを思い出しました。確かレシートが……あった」

綾花がカバンから出したレシートに皆の視線が集まった。レシートに打ち込まれた時刻は十時四十五分。綾花の自宅近くのコンビニの住所も記録されている。十一朗が指定したアリバイ成立の範囲内だ。

しかし、まだそれでは安心できない。レシートでもアリバイをつくろうと思えば出来る。誰かに頼めばいいことだからだ。頼みの綱はコンビニの防犯カメラが、綾花の顔をしっかりと捉えてくれているかということになる。

それでも十一朗は安堵の息をついた。綾花の性格は知っている。

嘘をつくわけがないと信じていた。そう、彼女は大切なミス研家族の一員だ。

「良かった。これでアリバイ成立だな。それは君から警察に渡したほうがいいよ。但し、アリバイがあるか追及されてからだ。こういうのもなんだけど、刑事と関係がある俺が助言したと思われるとまづいし、先にアリバイを言うとな変な詮索されるのは確実だからさ」

事件発生の際には、第一目撃者を刑事は疑う。妙な言動を探るのは彼らの習性なのだ。

被疑者から、突っかかりのある説明を受けた時の警察の目は疑いしかない。

そんなことも十一朗は知っているので、敢えて綾花には言わない方がいいと告げた。

その時だ。裕貴が合わせた手の音が室内に響いた。

「ねえ、八木さんの歓迎会をしようと思っているんだけど、都合の悪い日とかある？」

先走りすぎの裕貴の発言に十一朗は目を細めた。

事件のこともあったばかりなので、綾花にしてみたら迷惑かもしれないだろうと思う。裕貴にしてみたら気分転換させるつもりで誘ったのだろうが、変に感じるのは女子と男子の考えの違いから生じるものなのかもしれない。

しかし、裕貴の提案にワックスも賛成のようで挙手した。

「俺、ここらへんで評判の店がないかって聞いたんだ。で、見つけたのが二駅離れた、エナノスって店。スペイン料理店なんだけど、ガスパチヨとパエリアがうまいらしくてさ」

聞いて十一朗は眉間に力を入れてしまった。事件現場の最寄り駅だからだ。

あれだけの事件だったので、新聞でも大きな記事で載っていた。どの駅構内で男が轢かれたのか、どこで殺人事件が起きたのか地図まであったのを記憶している。

エナノスという店は事件現場と降り口は逆だが、あまりいい店の

選択とはいえない。それでも、現場の悲惨さを知らない三人だから、互いに同意したようだった。

「その駅なら、私の母が働いている店の最寄り駅です。仕事が終われば送ってくれるかも」

話の中で、綾花がさりと口にした。聞いて十一朗は、思わず息を吞んでしまった。

事件現場と綾花の母の勤務地が同じだとは予想していなかった。そして謎の男が残っていたという綾花の電話番号。

腕が震えた。安堵してから疑惑発生で思考が破裂しそうになる。十一朗は綾花を見た。

「八木、君のお母さんの利き手って……左か？」

遠回しに聞くことが出来なかった。確信に近い質問で綾花の目が見開かれる。

ワックスも裕貴も動きをとめて、唾を飲みこみながら綾花の答えを待っていた。

「左です。もしかして、東海林先輩……」

『母を疑っているんですか』という続きの言葉を、綾花は押し殺したようだった。少なくとも、彼女の中にも母が共犯ではないかという疑いが生まれたはずだ。

それでも、何かが十一朗の中で引っかかっている。本能が叫んでいた。

この事件は何か隠されている。推理を怠るな。米粒のように散らされた証拠を探せ。

十一朗は立ち上がった。そうだ証拠だ。鑑識員が口にしていなかった重要物が、現場に残されているに違いない。

「そうだ。『裏抜け』していた遺書だ……慌てて書いた遺書に、あんな筆記用具使うわけがない。現場に行かないと」

前に進んだ途端、足元に置いてあったゴミ箱を蹴飛ばした。足元が見えていないほど混乱していた自分に十一朗は気づいた。

散らばったゴミを掃くほうが早いと裕貴は判断したのだろう。掃

除用具入れからホウキを持ってくる。ワックスも近づくと、大きなゴミを拾ってゴミ箱の中に捨て始めた。

二人の動きを見ながら、十一朗は情けなくなった。ミス研の部員は家族も同然と思っておきながら、事件の真相を語っていないし、繋がった推理を教えてもいない。

一人で戦う自分がカッコいいと思ってしまっていた。しかし、それは信頼や協力という好意を無視した馬鹿な行いだ。外れた道を修正してくれる仲間がいるからこそ、都立明鏡止水高等学校ミステリ―研究部は成り立っている。

十一朗は反省した。自殺屋事件の時もそうだった。皆がいたことで事件は解決できたのだ。

「みんなに頼んでいいかな。事件現場に証拠が落ちているはずなんだ。鑑識課員はそれを見つけていない。捜査が難航しているのは、きっとそのせいだ。一緒に探してほしい」

見つけられないのは、その証拠が絶対にあるという考えに鑑識も至っていないからだろう。

「久しぶりに、ミス研始動だね」

ゴミを綺麗に掃き取った裕貴が、十一朗を見てはじけるような笑顔を見せていた。

8・絡み合う鎖

街並みを前景に、紅く染まった夕陽が落ちていく。頭上では帰りの合図をするカラスの鳴き声が繰り返されていた。

十一朗が現場に訪れたのは昨日のことだ。今日は鑑識員の姿もなければ、刑事の姿もない。一般の通行も現在は許可されている。

前日に見た殺人現場と踏切を繋ぐ赤い斑点は、視認できないほど薄くなっていた。

凄惨な現場だ。ミス研部員といっても血糊を見る行為は適切ではないし、良いこととはいえない。十一朗は安堵の息をついた。

謎の男は遺書を書きながら、現場から踏切に向かって歩いている。歩く途中で手にしていた紙を切り取り、ある筆記用具で書いたのだ。

十一朗は男の遺書を、不用意に見せてくれた貫野のお蔭で確認している。その遺書には特徴的な跡があった。それが『裏抜け』という、インクが紙の裏に染み込んだ状態だ。

何を探せばいいのか、十一朗は話してはいない。裕貴たちは指示を待っていた。

「俺が立っているここから、踏切の手前の間に証拠が落ちているはずなんだ。それが男が遺書を書くために使った筆記用具……万年筆だ」

「万年筆？」

十一朗の言葉に敏感に反応したのは綾花だった。そう、ここではわずか数百メートルの間で書かれた遺書というのが、一つの謎となる。

裏抜けするような粗悪な紙に、万年筆という高級な筆記用具で書いたのは何故か？

あまりにも矛盾しているのだ。謎につまった時、誰もが考える。

男が持っていた筆記用具は、万年筆だけだったのではないか。万年筆は自分の所持品であったのか。計画的な犯行だったのか。

「ねえ、プラマイ。それって……」

次に問いかけてきたのは裕貴だった。推理スピードは遅いほうだが、今日は冴えている。

「なんとなくわかってきただろ。男は突発的に殺しをしている。それなのに遺書を書き、自殺未遂までした。誰かを庇っているのは確実なんだ。けど、そうなる疑問が残る。何故、犯行時に凶器を持っていたかということだ」

計画的犯行でなければ、凶器は手元にはないはずだ。だとしたら次に考えるのは、凶器を誰が持ってきたかということになる。

「凶器は共犯が用意した可能性が高い。主犯は意識不明の男じゃない。共犯者だ」

十一郎の推理に、綾花が唇を震わせていた。部室での会話を思い出したのかもしれない。『君のお母さんの利き手って……左か?』という十一郎の問いを。

言いながら十一郎は唇を噛んだ。まだ決まったわけではないが、良い方に向かっている気がしない。

はじめは綾花の無実を証明するためだった。けれど今は

「探すぞ。万年筆! 俺とプラマイが右側探すから、三島と八木は左側な」

重い空気を振り払うように、ワックスが率先して行動開始した。

十一郎はミス研のムードメーカーともいえる、ワックスのそんな部分に助けられてきた。

もし自分の推理だけで暴走していたら、裕貴も呆れて離れているだろうと十一郎は思う。夢中になりすぎて、周りがよく見えていない瞬間があると自覚しているからだ。

そんな時にワックスは、必ずと言っていいほど修正の道を切り開いてくれる。

ワックスの言葉とともに、証拠探しが始まった。鑑識員が見つけれなかった物だ。簡単に発見できるとは思えない。側溝や植え込みの中も調べる。

十一朗は自殺未遂をした男が残っていた軌跡を思い出しながら、証拠が落ちていそうな場所を見定めた。

植え込みに目標を決めてしゃがみこむ。中を覗いた途端に眩暈めまいがした。缶やコンビニパンの袋が大量に落ちていたのだ。

ゴミと一緒にモラルまで捨ててしまったのだろうか。十一朗は重い息をつきながら軍手を付けた。

こんなこともあるのかと用意して正解だった。ボランティア用のゴミ袋も持参しているので、通行人からしてみれば証拠集めなどとは思われないだろう。

面倒臭いのでゴミを纏めてつかむ。すると右手に激痛が走った。何かが突き刺さったのだ。

「いつて！」

慌てて引つ込めた軍手が黒く染まっていた。流出したインクに間違いない。

「プラマイ、これ見つけたぜ！」

すると、隣にいたワックスが声を上げてからエンジの物を十一朗に見せた。万年筆のキャップに間違いない。十一朗もつかみ出したゴミを取り分ける。その中に万年筆の本体があつた。キャップが外れていたために、ペン先が突き刺さったのだ。軍手を取ると血が滲んでいた。

「うわっ、最悪……」

それでも一回の手掴みで発見できたのは幸運だろう。暗くなると苦戦は確実だった。

「おい。裕貴、八木、見つけたぞ」

十一朗の報告を聞いて、二人が駆け寄ってくる。

万年筆は土で汚れていたものの、原形はとどめていた。色は女物だ。汚れを軍手で拭き取ると、文字が刻印されているのに気づいた。『A Y A K A ・ Y』と彫られている。謎の男と唯一繋がりのある綾花の名前だった。

「おいおい、まじかよ。警察に見つかりとまずかったんじゃないか。

危機一髪だな」

文字を見たワックスが言うが、提出しないわけにはいかないだろう。

十一朗は持ってきた透明のビニール袋の中に、万年筆を慎重に入れた。

「気は進まないけど隠すわけにもいかないよ。証拠隠滅は刑法一〇四条。二年以下の懲役または二十万円以下の罰金。それに八木にはアリバイがあるし、大丈夫だ」

ワックスは「でもなあ」と不安そうに肩を落としながら、覗きこんできた綾花を見た。

その時だ。

「おい、藪から坊主ども。何でここにいるんだ。搜したじゃねえか」怒号ともとれるような野太い声が響いた。十一朗は息をついた。

もう振り返る気にもならない。しかし、搜したとはどういうことだろうか。背後にいるであろう貫野を見た。

「もう何も言う気にならないよ……搜したって？　なんで？」

十一朗の問いに貫野が、また遺書を取り出して見せた。どうやら警察も考えるところは同じらしい。後ろにいる文目は、ミス研部員と会ったのは当たり前というような顔をしている。

「遺書は包装紙だと分かった。調べたら筆記用具店の物で……どうやら、プレゼント用の包装紙らしい。で、店員が程度覚えていて、顧客リストを調べたら」

言いながら貫野は、コピーした紙を取り出した。顧客リストの中に蛍光ペンで印が付けられている部分があった。客名は「八木和歌子」。

見た綾香の表情が歪んだ。十一朗も直感した。綾花の母の名に間違いはないだろう。

用紙を懐に入れた貫野は、一息つくとも十一朗を見た。

「だから搜していたんだ。それに遺書の紙が包装紙と分かった今、どこかに万年筆も落ちているはずだからな。買ったのは高級万年筆

の女物。名前が彫られた特注品で」

「そつちの考えかた次第では、協力するけれど、どうする？」

貫野の話が終わる前に、十一朗は話を切り出した。さすがに貫野も嫌な表情を見せた。裕貴とワックスも顔を見合わせている。十一朗の手には貫野の言った証拠があるからだ。

「この野郎、先回りしてやがったな。どうして、てめえは行く先々で……」

刑事の勘だろう。十一朗が何を隠しているのか気づいたらしい。狙い通りの反応だ。

しかし、次に見せた貫野の行動は十一朗を驚かせた。親指を立てて駅前の喫茶店を指差す。来いという指示に違いなかった。

「俺は人の手柄を取るガラじゃねえからな……左利きの真犯人の情報をくれた借りは返してやる。他の奴らはどうする？」

聞いて十一朗は感づいた。警察は八木の母親が左利きというのを知ったのだろう。共犯は綾花の母。その段階の捜査を開始したはずだ。

それにしても、この気難しい男の変わりようは、どこから伝染したのだろうか。

十一朗の中でちよつとした推理が働いた。今朝のことかもしれない。

「もしかして貫野警部補。親父に俺が捜査に足突っ込んだ話をしたのを、悪いと思ってるわけ？」

十一朗の問いに、煙草をくわえようとしていた貫野が吹き出した。落ちかけた煙草を何とか空中で捉えて口にくわえる。

「馬鹿言うんじゃないよ。子供の悪さを親に教えるのは、大人の常識だろうが！」

貫野の言動がおかしい。火を点けようとする両手が震えている。すると、

「先輩、捜査会議で左利きの真犯人がいるという話をしたんです。その後に刑事部長に十一朗君の手柄だって伝えて」

文目が身を乗り出して語り出す。直後に貫野の首絞めが文目に決まった。

多分、こうなることを承知の上で、文目は言わなくていいことも語るのだろうと十一朗は思う。そうでなければ、こんな暴力的な男と長く組んでなどいないだろう。

しかし、父と貫野の間で、そんな会話が交わされていたというのは驚きだった。事件に首を突っ込んで邪魔をしたという報告だけなら、父の口から「誇りある一人息子」という言葉は出なかったのかもしれない。変な貫野の気遣いに笑ってしまった。

煙草を吸いながら、貫野が歩き出した。後を見ると、裕貴とワックスも付いて来ている。綾花も母のことが気になるのだろう。付いてきていた。

都内から離れた場所なので路上喫煙禁止区域ではないのだが、それでも歩き煙草はどうなのかと十一朗は思う。

「升田の件もあるし、話したいことは山積みだ。それとお前、進路変えたんだって？」

不意に、振り返りもせずに貫野が聞いてくる。

父と進路の話をしたのは今朝だ。情報が流れるのがかなり早い。一課の警部補が、刑事部長とここまで親密に話するのは稀ではないだろうか。

刑事部長でも人の親か。十一朗は父の裏の姿を垣間見ていた。

「俺、貫野さんと違って最後まで反抗期続けるほど、気合いがないというか、親不孝者じゃないというか……」

「その減らず口、就職したら叩き直してやるから、楽しみにしとけ」

「俺、国家公務員一種試験受けるつもりなんだけどさ。そうすると貫野さんを追い抜くのって簡単なんだよな」

貫野の後ろで文目が含み笑いを続けている。彼の階級は巡査なので、蚊帳かやの外だ。

喫茶店の扉は貫野の手で開かれた。大人数なので一番奥の席に通される。さすがに込み入った話なので、誰かに聞かれるわけにはい

かない。最適な場所だった。

貫野にとつては灰皿があるのが一番の条件らしい。灰を叩き落してから、渡されたメニューを放り投げた。

「奢^{おご}つてやる。夕飯いらないって親に電話しとけ」

喫茶店とはいってもグラタンやパスタのセットまである。十分に腹を満たせそうだ。

メニューを聞きに来た店員に、遠慮なしに皆が注文する。貫野は目を細めただけだったが、十一朗は「これ、また親父に告げ口されるな」と思った。

隣にいる文目に「お前は自分持ちな」と言いながら、貫野が十一朗を見た。

「まずモノを見せる。話はそれからだ」

言われて十一朗は拾った万年筆を渡した。刻印を見た貫野は文目に手渡す。

綾香の名前の刻印がある万年筆だ。裕貴とワックス、綾香もやり取りを見ながら不安そうな顔をしていた。

「何で万年筆があるってわかった？」

そして貫野は、誰もが思うであろう疑問を十一朗にぶつけた。

「万年筆で書いた特徴だよ。文字の強弱とか裏抜けとかさ。店でインクの出具合を確認したんだろうな。万年筆はインク注入しないと書けないからさ。これ俺が欲しくて母さんに頼んで、まだ駄目って言われたメーカーなんだ。確か価格は二万五千円だったかな。高いのはインクの流れや持ち手自体が違うから……俺、大学合格したら、絶対に買ってもらおう」

そこまでの価格になると大人の買い物である。しかも、高い万年筆は一生物だ。

他人が引くほど極めた十一朗の万年筆の真髓語りを聞いて、貫野は煙草を吸ってから続けた。

「取引返しに教えてやるよ。升田のアパートのことだ。家宅搜索したら偽ブランド品が大量に見つかった。密輸入品だ。他にも盗難さ

れた宝石類があつた」

「俵井が動揺したのつて、それが理由だったのか。八木、升田つて名前に心当たりはあるか？」

十一朗の問いかけに、綾花は首を横に振った。意識不明の男といい、綾花は事件とは何の接点もない。やはり、綾花の母が何かを隠している気がしてならない。

運ばれてきたコーヒーに、何も入れずに飲んだ貫野が言った。

「升田は意識不明の男から七百万もらうつもりだったんだろつな。そして、他の金蔓が密輸入品に絡んでいる可能性が高い」

皆が頼んだ料理が、場所が狭いと言いたげに次々と運ばれてくる。ちやつかりパスタセットを頼んでいる文目を見て、貫野はまた手帳で彼の頭を叩いた。

十一朗もカローリで頭を回転させようと、運ばれてきたサラダにフォークを入れる。

「俵井は何年か前の貸しつて升田に聞いたつて言つたよな。七百万なんて大金、升田つて人が何年も徴収せずに黙っていたなんて思えないけど」

「そのことなんだが、升田は△所に入っていたんだ。だから徴収できなかつた」

「△所？ 何で？」

「詐欺事件起こしてな。そのあと、取り囲んだ刑事数人を大怪我させながら逃走した。奴の身柄を確保したのは、その事件が起きた二週間後だ。△所に入つたのは八年」

一通り聞いて十一朗は納得した。刑期を終えて金がなくなったので、金蔓に頼つたのだ。

「これで意識不明の男が身元を隠していた理由がわかつたか。七百万の徴収から逃げていたんだ。そして、升田と顔を合わせて争いになつたつてとこだろつな」

しかし、まだ引かかる。この貫野の推理では共犯者の影が見えてこない。

「共犯者の動機は？」

十一郎の問いに、貫野が運ばれてきたサンドイッチのパセリを抜きながら舌打ちした。

「交際相手が金の徴収迫られてんだ。殺す動機は十分じゃねえか」

「交際相手って……決まったわけでもないのに。それに人殺しって、そんなに簡単にできるものかな？ 普通は恨みとかあるだろ？」

「今は人が死ぬのを見たかった理由で殺す奴もいるし、普通の考えじゃ通用しないこともあるんだよ」

貫野は乱暴に二つのサンドイッチを潰すと、同時に口の中に入れた。刑事は早食いでなければ優秀ではないと聞いたことはあるが、目の前で実演されたのには驚いた。

「それと、あの子の母親を事情聴取することになる。勤務地もこの駅だし、事件があつた直前の時間に店を出ていることが分かっている。利き手も左だし、誰も疑わない。残念だがな」

最後の『残念だがな』に貫野の性格が聞いて取れた。刑事に存在してはいけない感情、私情

綾花の仲間である十一郎を前に思わず口に出したのだ。

しかし、謎が解けていない。それは凶器だ。十一郎は共犯が準備したと予想したが、その話だと辻褄が合わない。凶器を働き先に持つてくるなど、考えられるのだろうか。

十一郎はコンソメスープを飲んでから、貫野を見た。

「そういえば、凶器のこと聞いてないな。刃渡り何センチ？」

「高校生がそこまで聞くか？ バタフライナイフだ。洋画とかで筋肉質のおっさんが指先動かして牽制しながら、刃物出し入れするのを見せびらかす折り畳み式のあれだ」

最後の説明は完全にこちらを馬鹿にしている必要のない説明だ。こういった貫野の大人げないところを十一郎は好かない。

「ますます変じゃないか。女性がそんなの持ち歩くものか？」

十一郎が聞いた瞬間だった。貫野の携帯が鳴った。着メロは何度か聞いているので、すぐに分かった。さすがに会話を聞かれるのは

抵抗があるのだろう。席を立って外に出ようと動く。

ところが、貫野は眼を見開いた。店内に響く声で相手に興奮して聞き返した。

「それは本当か？ 間違いないんだろうな」

言って十一郎に視線を向ける。複数回、応対を繰り返した貫野は外には出ずに、その場で話を終わると席に座った。

深く腰掛けて瞼に手をあてたまま、「くっそ……」と続かない愚痴を言う。

どうにも話しかけづらい雰囲気を見て、文目が息を吸い込んで貫野に聞いていた。

「あの先輩。電話の内容ってなんだったんですか？」

ようやく貫野が仰け反っていた体勢を整えてから、また十一郎を見た。

「認めたくないが、高校生名探偵殿の推理がどんぴしゃだよ。凶器は升田の持ち物だった。しかも鑑識が血液鑑定した結果、刺された順番がわかった。意識不明の男が一番目、二番目が升田だ」

信じがたい情報だった。自殺未遂した男が先に刺されていたとはどういうことなのか。

遺書の謎がますます深まる。そして、共犯だと思われる綾花の母と男の関係も

「どういうことだよ、それ？ ますます意味がわからないじゃないか」

身を乗り出して聞いた十一郎を、コーヒーを飲んだ貫野が睨みつけた。

「そりゃ、こっちも同じだ。しかも奴を治療した執刀医、今頃になつて気になっていることがあるって、入電してきたらしい。男には刺された傷が三か所あった。一つは今回のモノと思える刺し傷、残りの二つは古傷らしい。しかも、致命傷に近い傷だ」

謎が混在する事件は解決間近と思いきや、更に道を外れていた。

三人の口無したちが形成した鎖の絡み合い

「過去だ……口無したちが隠す時を遡らないと、この事件の真の解
決はない」

十一郎の中で推理という獣が再び吠えていた。

推理を怠るな。米粒のように散らされた証拠を探せと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8921v/>

十一ミス研推理録2 ~口無し~

2011年10月10日03時26分発行